
ドラゴン様にお願いを

残念無念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン様をお願いを

【Nコード】

N3290W

【作者名】

残念無念

【あらすじ】

オタクな少年龍一がある日裏庭で拾ったのは、「他称」神である異世界からやってきた、美少女に姿を変えられるドラゴンだった！
？ ドラゴンの持つ不思議な能力をめぐって政府や自衛隊、そして各国の思惑が交錯する中、龍一は続々と異世界からやってくるドラゴン達との同居を余儀なくされる。はたして龍一は、オタクライフを守り切ることが出来るのか！？

プロローグ 日常の終わり（前書き）

この小説にはネタが多く含まれています。出来るだけ解説しますが、詳しいことはググってくださいね！

プロローグ 日常の終わり

世界は平和である。神代かみしろ 龍一りゅういちは、机に右肘をつき、窓から空をぼんやりと眺めながら唐突に思った。

世界は相変わらず物理法則に従って動いている。手から離れたリングは地面に落ちるし、一日は24時間だし、地球は1年かけて太陽の周囲を回る。それらは龍一が生まれる前から変わらず、そして龍一が死んでからも多分変わらないだろう。

朝起きたらベランダにシスターさんが引っ掛かっているなんて事も、自転車に爆弾が仕掛けられて空からツインテールの女の子が降ってきて助けてくれる事も、一度死んでネクロマンサーにゾンビとして復活させられる事も、光る鏡のような物をくぐったら魔法の世界に使い魔として召喚されていたなんて事もない。そしてこの先、そんな事は絶対起きないだろう。世界は物理法則と科学に従って動き、そんな世界が変わるようなファンタジーな出来事など起きはしない。

代わりに待っているのは――と、龍一は前を向いた。龍一の前にはセーラー服を着た少女が椅子に座り、少女の前には詰め襟の学生服を着た少年が座っている。そしてさらにその先には、教卓と黒板に挟まれ、自分の名前を黒板にチョークで書いている40代女性の姿があった。

自分達に待っているのは定期試験や入試といった、進路問題だけだ。

龍一が今いるのは、どこにでもありそうな県立高校の教室の一つだ

った。今日は一学期の初日であり、龍一達が高校3年生になった日でもある。

毎年同じようなパターンの始業式を終えて教室に戻り、今はホームルームの時間だった。今後の日程を印刷したプリントが配布された後、始まったのは簡単な自己紹介だった。

担任の女性教師が黒板に名前を書き終わり、それから50音順に生徒が指名されて立ち上がって自己紹介していく。

名字がア行の生徒の自己紹介が終わり、カ行の生徒が自己紹介を始めていく。自分の番が来たので龍一は立ち上がり、

「神代龍一です。今後1年間、よろしくお願いします」

とだけ言った。囁まずに言えた、と内心ほっとしたが、他の生徒から返ってきたのはおざなりな拍手だけだった。

それは仕方がない事なのかもしれない。龍一は友達が多い方ではなく、親友と呼べる連中は全員別のクラスだ。3年生に上がって行われたクラス替えの結果、龍一が所属する3年A組には「なんとなく顔は知ってるけど、あまり話した事はない」ような2年生時のクラスメートしかいない状態になってしまった。

その後も続く自己紹介を右から左に受け流しつつ、再び龍一は窓から空を見る。座席は名字がア行の生徒が廊下側から指定されていくので、カ行の龍一は窓際からかなり離れた位置に座る事になってしまった。窓際が好きな龍一としてはさっさと席替えをしてもらいたいのだが、当分「生徒の親睦を深めるため」という名目でしばらくこの席順は続くのだろう。そう考えると鬱になる。

結局宇宙人、未来人、超能力者は自分の所に来いと言う少女も現れず、自己紹介は終了となった。内心そんな事を期待していた龍一は、少しがっかりした。

自己紹介の後は特に行事もなく、別れの挨拶をしてホームルームは終わった。ホームルームが終わるなり女子は示し合わせてあったかのように一斉に集まり、男子はそれぞれ顔見知り同士で集まって小グループを作り、親睦を深めるために赤外線携帯電話のメールアドレスを交換し始める。龍一はしばらく教室に留まっていたが、誰からも「アドレス教えて」と声をかけられる事はなかった。

虚しさを感じつつ席を立ち、そのまま廊下に出る。廊下でも生徒が集まって、春休み明けの再開を祝って馬鹿騒ぎをしていたが、ここでも誰からも声をかけられなかった。

結局誰にも声をかけられる事なく、校舎裏の駐輪場まで来てしまった。龍一はそれほど交遊関係に関して積極的な人間ではなく、大人しくて影が薄かったのも声をかけられなかった原因だろう。

とにかく、学校では第一印象で全てが決まる。第一印象が良かったら友人が多く作れ、集団の中でも目立つようになる。しかし好印象を与える事に失敗した人間は目立たず大人しく生きる事しか出来なくなり、最悪イジメの対象になってしまう。今日のような人達と年度の初めは重要だというのに。

さらに鬱な気分になりつつ銀色のママチャリに跨がり、龍一は呟いた。

「……なんか、面白い事でも起きてくれないかなあ」

その時強い風が吹き、地面に降り積もっていた桜の花びらが舞い上

がる。舞い上がる花びらが、まるで吹けば飛ぶような存在の自分を表しているような気がして、思わず龍一は目を逸らしてしまった。

やっぱり、世界は平和だ。世界が劇的に変わることはない。それは空気のような存在感の自分も変わらない、という事だ。

何か世界が変わるような、そんな出来事が起きるのを龍一は熱望していた。

ほとんどのライトノベルや漫画、アニメの主人公は平凡で平和で目立たない生活を送る事を望むが、ある日突然何らかの原因で——大抵は空から降って来たりするダイナミックな登場の仕方をする美少女だ——平穏な日常が変わってしまう。そして主人公は嫌々ながらも平穏を取り戻すために行動し、いつの間にやらヒーローに仕立てあげられてしまうのだ。

だが龍一は、日常が変わる事をいつも期待していた。この世界は退屈で閉塞感に満ちていてつまらない。それよりもっと自分が活躍出来るような、そんな世界が訪れることを熱望していた。

どんな些細な事でもよかった。例えば宇宙人や未知の生物が発見されたとか、そんな事で十分だった。世界が変わるような希望さえあれば、まだまだこんな息苦しい世界でもやっていけそうな気がするからだ。

しかし、現実は一筋縄ではいかない。どんなに願っても地球外生命やツチノコやネッシーが発見されたというニュースは飛び込んで来ないし、ましてや登校中に曲がり角でパンをくわえた女の子とぶつかってしまったなんて事も起きない。現実は一筋縄ではいかないからだ。

「はあ……………」

考える度に気が滅入ってしまう。これ以上憂鬱にならないよう、龍一は自転車のペダルを力強く漕ぎ出した。

始業式があったため学校は午前中で終了したが、龍一はまっすぐ家には帰らなかった。学校の南側に300メートルほど進むと、大通りに面した全国チェーン店のコンビニがあった。

龍一は高校2年生の時からこのコンビニでアルバイトをしていた。龍一の高校はアルバイト自由だったので、特に問題はなかった。さらに多くの生徒が利用する高校に一番近い駅とは逆の方向にあるので、誰か知っている人が来店する心配が少ないのが魅力だった。従業員室で素早く着替え、少なくなった商品を棚に補充していく。まだ11時ということもあって客足は疎らだが、正午が近づくにつれて昼食を買いに来る客が増える。棚は常に商品で満たしておく必要があると言われていた。

今の時間帯には店には龍一と店長しかいない。もう少ししたら大学を卒業しても就職しなかったフリーターの先輩が来る予定だ。

冷蔵庫にペットボトル飲料を並べていると、突然船に乗っているかのような感じがした。

次の瞬間、ゆさゆさと地面が横に揺れた。地震だ。震度は4くらいあるだろうか。

「まただね、地震」

「そっすね。ここ最近多いですよね」

カウンターの中にいる店長に答えながら、龍一はつい斜め上を見上げた。地震が起きた時の癖なのだ。

地震はすぐに収まり、再びペットボトルを冷蔵庫に並べていくと、

「まただ……」と店長がケータイを眺めながら呟いた。

勤務中にケータイ見ていいんかい、とツツコミを入れたくなったが堪え、「何がまたなんですか？」と龍一は尋ねた。

「結構大きい地震が起きたってのに、どこも地震速報を出さないんだよ」

店長はそう言ってケータイの画面を突き出した。カウンターと冷蔵庫は店の端と端にあり、小さなケータイの画面が見えるわけがないでしょうと再びツツコミたくなる。

しかし、ここ最近地震が多く、しかも地震速報が出ない事は確かだ。数年前に東北地方で1万人以上の死者を出した大地震以降、全国の地震監視システムはより充実されたはずなのだが、何故か最近地震があってもいつまでも震度が発表されないのだ。

結構揺れているので、地震計が感知出来なかったというはずがない。地震計が壊れているという可能性も排除出来なかったが、故障しているならさっさと修理に来ているだろう。

しかもこの地震、この付近でしか起きていないようなのだ。春休み中に結構揺れた時があり、龍一が市外に住む友人にメールで「今の地震強くなかった？」と尋ねると、「地震なんてあった？」と返ってきたことがある。

もっと奇妙な事に、この地震は人間しか揺れないようなのだ。今並べていたペットボトルの中身も、地面が結構揺れたというのに波一つ立っていない。揺れは感じるが、目に見えて地震が起きている事を知らない。ブロック塀が崩れたり棚から物が落ちるといいう事はないが、確かに揺れているのを感じる事が出来る。

——何か起きないかと思ってたけど、大地震で瓦礫に潰されるのだけは勘弁な！

龍一はそう思った。世界が変わればいいとは思っていたが、死人が出るような出来事は御免である。

「一応気象庁に通報しておいた方がいいかねえ？」

「次強い地震があっても地震速報が出なかったら、通報しておいた方がいいんじゃないですか？ でも別に家が潰れたりしてるわけじゃないし、地震が起きてるって証拠がないですよね」

そう答えた直後、自動ドアが開いて客が入って来た。「いらっしやいませ」と店長と唱和した龍一は、残った商品を素早く棚に並べてカウンターに向かった。

バイトを終えて外に出ると、陽はとくに沈んでいた。あちこち傷がついた腕時計を見ると、既に午後8時を回っている。

コンビニ裏に停めておいた自転車に跨がり、ペダルを漕ぎ出す。家に帰る前に、今宵の夕食を買っておかなければならない。

龍一の家は高校からもコンビニからも近く、自転車で10分もかからない距離にある。そのため家に一番近いスーパーにもあつという間に着いた。

店内に客はあまりいなかった。夕食の買い物をする時間帯はとくに過ぎており、あちこちで今日の商品売り尽くそうとする値引き

が始まっていた。

龍一がバイトついでに遅い時間にスーパーに来たのは、この値引きが目的だった。保存が利かない生魚などは店頭に並べたその日に売り尽くすのが普通であり、夕食の材料を買いに来た客のピークが過ぎてしまえばその後売れる事はあまりない。なので廃棄するよりは安い価格で売ろうと値下げする。時には5割以上値引きしている場合もある。

夕食（既に夜だが）の材料と明日の朝食、そして昼の弁当の材料をまとめて買っていると、今度こそ龍一は帰宅の途についた。家はスーパーから歩いて2分以内の距離にあり、あつという間に家にたどり着いた。

龍一の家は、2階建ての日本家屋だった。庭は表と裏にあり、道路に面した表の庭に自転車を停める。家の中には明かりが一切点いておらず、ドアの鍵を明けた龍一は「ただいま……」と小さく呟いた。

「おかえり」と返事してくれる人はいなかった。龍一はこの家に、たった一人で住んでいるからだ。

この家は元々龍一の母方の両親住んでいたのだが、祖母は5年前、祖父は2年前に死んでいた。龍一の父親は彼が10歳の時に浮気をして家から出て行き、母親もある「特殊な事情」により数年前から家に帰って来れなくなった。その後龍一は母方の両親に引き取られ、祖父が死んでからはこの家で2年間一人暮らしをしていた。

だがそんな生活にもとくに慣れた。今は家事炊事全般を一人でこなせるし、孤独感も感じない。ただし祖父母の遺産と保険金がある

とはいえ生活にはあまり余裕がなく、週に数回バイトして買い物は出来るだけ安く済ませているのだが。

半額以下の値段で買ったアジは塩焼きにして、冷蔵庫の中の野菜の切れ端を使って味噌汁と野菜炒めを作る。ご飯は昨日炊いた奴が冷蔵庫に入っていたので温め、質素な夕食が完成した。

畳が敷かれた居間のちゃぶ台に夕食を並べ、一人「いただきます」と呟き食べ始める。食べながら居間の隅に置かれたプラズマテレビとブルーレイプレイヤーを起動すると、画面からは軽快な音楽と共に、昨晚録画したアニメが再生され始めた。

龍一はいわゆるオタクである。

毎日深夜に放送されているアニメは欠かさずに録画し、休日には秋葉原に通っている。自室の本棚には参考書や学校の教科書資料集など影も形もなく、ライトノベルやマンガ、そしてアニメのファンブック等が所狭しと並べられている。マンガだけで数百冊あるので本棚だけでは足りず、一部は床に置かれた数個の段ボール箱にアニメのDVDと共に収納されていた。居間のテレビ台にはブルーレイプレイヤーと共に、ゲーム機の筐体がいくつも並べられている。さらに龍一の自室の机にあるデスクトップタイプのパソコン近くに置かれた箱には、ケースに入ったゲームのディスクがいくつも収納されていた。よく見ればそのケースの表面には、「R-18」だとか「18歳以上対象」と印刷されているのがわかるだろう。

龍一の生活にはあまり余裕がない。それは龍一が自分の趣味に全力で金をかけるからだ。

夏と冬に開かれる同人誌即売会には欠かさず参加して目当ての同人誌をゲットし、気に入ったアニメは初回限定盤やブルーレイBOXを購入する。それらの価格は高校生男子にとっては高価であり、龍一は代償として食費光熱費を可能な限り抑えた上にアルバイトをし、それらの費用を捻出していた。

学校で龍一が目立たない、というより空気なのは、この趣味が原因なのかもしれない。龍一は完全に二次元^{アニメ}の世界に生きていて、三次元^{リアル}の世界には何かを期待することは少なかった。いつも何か起きないかと考えているのは、少しでも三次元が二次元の世界に近づかないかと思っているためである。

「現実^{リアル}なんてクソゲーだ」という名台詞で有名な某マンガとそれが原作のアニメがあるが、龍一はその台詞に深く共感していた。ゲームに比べたら、現実なんて欠陥だらけで面白くもない。

そのため彼女だとか恋愛とかそういうものにも興味はない、彼女なら画面の向こうにいるからだ。

録画してあったアニメの再生が終わり、画面は地上デジタル放送のニュースに切り替わった。食器を洗おうと立ち上がった龍一の耳に、アナウンサーが淡々と原稿を読み上げる声が聞こえてくる。

『……竹島問題を巡って緊張が続く日韓関係ですが、安野防衛大臣^{あんの}は海上自衛隊に対し、海上警備行動の発動も視野に入れた態勢に入る事を命令しました。これについて韓国大統領は「日本の侵略に対して徹底的に戦う」との声明を出しました。野党の一部からは「侵略戦争の準備である」との批判が……』

ほら、まただ。龍一はそう呟いた。テレビを点ければつらい現実が否応なく耳に入ってくる。それらは何年も前から、下手すりゃ半世紀以上前から続くような問題ばかりだ。

マスコミはその現実をワイドショーに仕立てあげて放送し、無駄に不安を煽り立てる。そしてその問題に注目が集まるのは一時的でしかなく、すぐに鳴りを潜める。後に残るのは漠然とした不安感と閉塞感、そして段々大きくなっていく絶望だけだ。

まるで綿でできた紐で首を絞められているかのようだった。徐々に大きくなっていく息苦しさ。でも最後まで自分達に危機が迫っている事は実感しない。危機に気づくのは、綿が完全に絞まり呼吸が出来なくなった時だ。

そうして年々増えていく、世界に対する退屈と閉塞感、そして絶望。当然だ。何年も前から様々な問題について語られているのに、それらの問題が解決された事はほとんどないのだから。

解決出来ないのではなく、解決しようとしない。「まだなんとかなさ」と皆が考え、思考停止する。そのツケを払わされるのは、龍一達若者だ。

それらの事が、龍一を二次元の世界に走らせている原因の一つかもしれない。増えていく世界に対しての無力感や絶望。しかし二次元の世界では明るい希望ばかりが語られている。だから龍一は退屈で夢も希望も未来もない現実より、二次元の明るく楽しく退屈しない、夢のある世界に逃避しているのだ。

テレビに背を向けて食器を洗っている最中も、耳には暗い出来事しか入って来ない。

『中東の政情不安は収まることなく、アメリカを始めとしたヨーロッパ各国は新たなテロが起きる事を警戒し……』

『円安問題についてアメリカ財務省長官は「これ以上円安の進行を静観する事は出来ない」との声明を発表し、それを受けて為替市場ではドルを売って円を買う動きが一時高まりましたが……』

『2011年3月以降続く福島第一原発事故の問題について、本日新工程表の第4段階が終了した事が原子力安全保安院より発表され……』

『本日正午、年金支給額のさらなる引き下げに反対する高齢者のデモが国会前で行われ……』

『「政府は我々を殺す気かーッ!!」……』

『本日午後4時頃、東京都XX区XXの尾形義博さん宅から「親を殺した」という通報があり、警察官が急行すると玄関には血まみれの尾形さんの息子が立っており……』

世界は平和だ。その考えを龍一は少し改めた。

世界は平和に見える。だがそれは、自分の周囲だけの事でしかない。現実には問題なんてあちこちに転がっているのに、誰もが目を逸らしているだけだ。そしてその「誰も」には、龍一自身も含まれる。

きっと世界は退屈なまま、緩やかに終わりに向かっているのだろう。そして終わりを迎えるまで、龍一はずっと世界が退屈だと思い続けるに違いない。

「……ほんと、何か面白い事でも起きないかな……」

そうすれば終わりが来るとしても、それまでの退屈せずに済むのに。嫌な現実から逃げられるのに。

出来ればその面白い出来事に近く、なおかつ自分に何か被害が出ないような立ち位置にいたいな。龍一はそう考え、最後の食器についた泡を流した。

神様は人間の願いなんて、無視するか極端な形でしか叶えてくれない。龍一は昔、祖父からこんな事を聞いた。

龍一はその言葉を、すっかり忘れていた。

龍一は翌日も学校があるという事で、いつもより早く眠りについた。そして午前0時を向かえた瞬間、これまでとは比べものにならない大きな揺れを龍一は感じて飛び起きた。

慌てて明かりを点けて部屋の様子を確認するが、特に変わった事はなかった。龍一は昔東北地方沿岸を壊滅させ、1万人以上の死者を出した大地震を関東地方で体験した事がある。確かあの時龍一がいた地域は震度6弱の揺れだったのだが、その時と同じかそれ以上の

揺れを今感じたのに、棚から本が落ちていることはないしカーテンすら揺れていない。大きいものの、いつもの人間にしか揺れを感知出来ない地震だった。

人間しか揺らさない地震なんて、宇宙から謎の電波でも飛んできてるのか？ そんな事をぼんやりと考えたが、考える事よりも、中断された睡眠が訴えかけてくる眠気が勝利した。

明日になったら気象庁にでも通報しよう。その思考を最後に、龍一は床に敷いた布団に再び倒れ込んだ。

一方家の裏庭では、奇妙な現象が起きていた。

物干し竿のすぐ傍、何もない空間が突如として光り始めた。その光は数秒後、人間の形に光っていた。

現れた光る人影は糸が切れた操り人形のように身体から力が抜ける。光る人影は、物干し竿に夜干ししてあったシーツを手がかりにしようと思ったのか手を伸ばしたが、掴まれたシーツは物干し竿から洗濯挟みと共にあっさり外れた。

光る人影は地面に倒れ込み、舞い上がったシーツがその身体を隠すかのように覆い被さった。

そして再び、夜の静寂が訪れた。

プロローグ 日常の終わり（後書き）

ネタ解説

ベランダにシスターさん：とある魔術の禁書目録

自転車に爆弾：緋弾のアリア

ゾンビ：これはゾンビですか？

光る鏡：ゼロの使い魔

宇宙人、未来人、超能力者：涼宮ハルヒの憂鬱

現実なんてクソゲーだ：神のみぞ知るセカイ

御意見、御感想お待ちしております。

第1話 ファーストコンタクト

「あんたさえないなければ……！あんたさえないなければ……ッ！！」

今でも、時々夢に出てくる。

蛍光灯の豆球だけが点り茶色に照らされた、あの狭く汚い部屋。

「あんたさえないなければ、いなければわたしは！！」

母さん、あなたは心が弱い人だった。

父さんが浮気をして出て行った後、あなたは徐々に壊れていった。

「死ねッ！！ あんな男との間にあんたを作ったなんて虫酸が走る！！」

振り下ろされる灰皿。押し付けられる火の点いたタバコ。顔面を殴られ思わず顔を抑えてしゃがみ込むと、今度は爪先が顎にめり込んだ。

倒れ込んだぼくを、母さんは執拗に蹴り続けた。腹、背中、顔。ありとあらゆる箇所を。

止めてよ母さん！ ぼくは何もしてないよ！！ なんでぼくが、こんな目にあわなきゃならないの！？

そんな言葉が心の底から沸いて来た。しかし、その言葉を口にすることはできない。母さんがぼくの口に猿轡をしているから、代わりに出てくるのはくぐもった呻き声だけだった。

母さんは普段はぼくを大事にしてくれた。ちゃんとご飯を食べさせてくれたし、テレビも一緒に見た。

でも時々、何かのスイッチが入ったかのように母さんは豹変する。殴る蹴るは当たり前。ぼくを押し入れや風呂場に閉じ込めたり、食事の水も与えてくれない時もあった。

ぼくはそれを、いつも耐えてきた。母さんはきっと、何か事情があってこんな事をしているんだ。だから母さんは、こうする事しか出来ないんだ。

ぼくはそう考え、いつも耐えた。母さんには逆らわなかった。母さんはこんな事をする人じゃない。これは仕方のない事なんだと自分に言い聞かせた。

でもある日、ぼくは母さんが豹変した理由を知った。

その時ぼくは、生まれて初めて母さんに逆らった。いや、初めて自分のやりたい事をやりたいように、自分の意見を主張したといった方が正しかった。

だから、ぼくは、母さんを――。

目覚まし時計のアラームで、龍一は目を覚ました。下着はもちろん、寝巻に使っているジャージも汗でぐっしり湿っていた。

まただ。またあの夢だ。

時々龍一は、あの日の出来事を夢で見る事がある。それは龍一にとって苦痛でしかなく、起きる事でしかあの悪夢から解放される手段はなかった。

昨夜発生した地震によって眠りを妨げられただけでなく、悪夢を見たせいでいつもより頭が重かった。4月とはいえまだ少し寒い季節であり、暖かい布団を出るのが億劫になる。

何度も襲ってくる睡魔をどうにか撃退して布団からはい出て、とりあえず1階に下りる。朝食と弁当を作らなければならぬため、時刻はまだ6時半前である。

階段を下りながら欠伸を噛み殺す。全身が重く、また布団の中に戻りたい衝動に駆られる。

龍一の自室は2階にあり、そして2階に通じる階段は裏庭の前を通る廊下にある。階段を下りた龍一は、裏庭に干してあったシーツが地面に落ちているのを窓越しに見た。

「……ったく。朝から眠いのにな、シーツまでまた洗わなきゃならな

いのかよ」

龍一は一人暮らしをしているので、家事炊事全般を一人でしなければならぬ。学校があるので洗濯をして干すのは早朝か夜にしか出来ず、さらに早朝に洗濯機を回すのは近所迷惑になる。そういった理由で、洗濯物はいつも夜に干す事になっていたのだ。

朝から面倒だなと思いつつ窓を開けて縁側に出て、洗濯物を取り込む時に使うサンダルを突っかけて裏庭に出る。再び大欠伸をしながら、何の気なしに地面に落ちたシーツを取った龍一は、

次の瞬間、固まっていた。

シーツの下には地面ではなく人肌があった。その身体のラインは女性特有の緩やかさを描いており、そしてシーツの端からは少女の顔が覗いていた。

少女の髪は金色だった。俯せに倒れた少女は指一つ動かさず、まるで死んでいるようだった。

「なっ、なんじゃこりやあああああああ!？」

後ろに飛びのきながら思わず絶叫が飛び出て、近所迷惑になると思いい慌てて口を塞ぐ。そして龍一は、恐る恐る少女に近づいていった。少女は一糸纏わぬ身体だった。少女を覆うように落ちたシーツや、腰まで届こうかという長さの金髪が、その身体の大部分を隠していた。

え、何これ？　なんで裸の女の子が俺ん家の裏庭に倒れているの？
　　どういう事なの…？

バラバラの思考が次から次へと溢れ出し、頭の中が混乱した龍一は周囲に視線を巡らせた。そしてその視線は、少女の身体で止まってしまう。

「いかん、危ない危ない危ない……。俺は三次元に興味はないんだ。リアル女の裸なんて価値はない」

そうだらしない自分を戒めるように呟いて少女の肢体から目を逸らすが、それでもチラチラと視線を戻してしまう。

よし、クールになれ、俺。そう自分自身に言い聞かせた。まずはあの少女が誰で、なんで全裸で人の家の裏庭に倒れているのかを推測する。

染めてない限り、金髪という事は少女は外国人に違いない。でも龍一に外国人の知り合いなんていない。お世辞にも英語の成績は良いとは言えず、英語の授業で外国人教師と話す時には、最終的にはボディランゲージになってしまう程だ。

そして何故裏庭で倒れているのか？　道に迷って龍一の家に入り込んでしまったとしても、それなら玄関か表の庭に倒れているはずだ。わざわざ裏庭に迷い込んでくる理由がない。

最も重要な問題だが、何故裸なのだろうか？　まさか彼女に服を着る習慣がない……。なんて事はないだろう。

無理矢理考えられるシナリオとしては、男に暴行を受けた後必死に逃げてきて、途中で家に入り込んでしまい、力尽きて倒れたといった事しか龍一には思い付かなかった。しかし暴行を受けたとしても、見る限り少女の身体にアザや傷がある形跡はない。

「……はは、そうか。酔ったら脱ぐ癖がある近所の人が酒を飲んで間違って俺ん家の裏庭に入り込んだじゃったんだな。って、んな訳あるか!!」

自分でボケて自分にツツコミを入れながらも、必死に落ち着こうとする龍一。

とりあえず警察か消防に通報しようかと考えたが、止めた。「裸の女の子が裏庭で倒れてました」なんて言っても、「君が彼女を連れ込んでイロイロとナニをするために裸にしたんだね?」と言われて事情聴取されるのがオチである。さらに少女が「この人に乱暴されたんです」なんて事実を捏造したら、タイーホされてしまうのは間違いない。

最近減ってきたとは言え痴漢冤罪が後を絶たないように、証拠が無くても警察とは女性の味方をする事が多い。どんなに「それでもボクはやってない」と訴えたところで、数日は警察の世話になる事が確かだ。それどころか証拠がほとんど無いのに前科者にされてしまう事だってあるかもしれない。

龍一は警察への通報は一旦置いて、まずは少女を起こす事にした。地面に落ちていた手頃な長さの木の枝を広い、上半身を思いつきり後方へ逸らしつつ少女の背中をつつく。

何度かつついても、少女が起きる気配はない。もしかして死んでい

るのか？　との考えが頭を過ぎった直後、

バキッという音と共に、木の枝の先端が消失していた。

「は？」

思わずマヌケな声を出してしまった。さっきまでいくらつついても起きなかった金髪の少女は上半身を起こし、口の中で何やら咀嚼していた。

「もぐもぐ……なんじゃ、メシじゃないのか」

そう言って少女は、ぺっと何かを吐き出した。それは先程まで少女の背中をつついていた、枝の先端だった。

少女は手の甲で口を拭うと、啞然と見ていた龍一に気がついたらしく、

「あ、おぬしは誰じゃ？」

と気安く声をかける。

なんでどうみても外国人な少女が日本語それも老人みたいな口調で話してるのか今木の枝食ったよねというか他人の家の裏庭に倒れていたにしては落ちていない？

などという考えが、一瞬の内に洪水のように龍一の頭に溢れた。色々疑問は尽きないが、まずは少女の観察をすることにする。

さっきまで俯せに倒れていて見えなかった少女の顔は、とても美しかった。完全と言ってもよかった。二次元の世界に生きる龍一でさえ、思わず見入ってしまうような美少女だった。

瞳の色は銀色だった。切れ長の目が、龍一をまっすぐ見ている。

身体は長い髪が大部分を隠していたものの、かなりスタイルがいい事を龍一は見抜いていた。どこかの雑誌の表紙を飾るモデルと言っても十分通用しそうである。歩けば10人中10人の男が振り返るだろう。

——って、何を冷静に観察しているんだ。俺はリアル女の身体になんて興味はない。女の子は画面の中だけで十分だ。

そう自分に何度も言い聞かせ、少女から目を逸らし続ける。

少女の髪が長かった事が幸いした。もし少女の身体の大部分が髪で隠れていなければ、龍一はきつと前屈みになって動けなかっただろう。

だがそんな龍一を見て、少女はニヤリとからかうような笑みを浮かべた。両腕を身体の前で組んで胸を隠し、

「なんじゃ。おぬし、男なのに女の身体に興味がないのか？」

「ばっ、馬鹿な事を言うな！ 女は二次元だけで十分だ！！」

「にじげん？ まあいい。そんな事より……見たいか？」

そう言って、今度は誘惑するような表情になる。

「そんなの見たくない……わけがない。見たくない……たい！！」

「おぬし、落ち着け」

その時、少女の腹が勢いよく鳴った。思わず少女の腹部に目が行き、再び慌てて視線を逸らす。

落ち着け俺！　まずは色々と事情を聞く必要がある。だけど見ず知らずの外国人っぽい少女と、ちゃんとコミュニケーションが取れるだろうか？

いやいや、彼女は老人みたいだとはいえ日本語を喋っている。ちゃんと意思疎通が出来るはずだ。言葉のキャッチボールだ。

龍一はそう考え、少女の身体を見ないよう明後日な方向を見ながら尋ねる。

「あの、君」

「腹が減ったの」

「君は誰で」

「腹が減ったの」

「……なんでここに」

「は　ら　が　へ　っ　た　の」

もはやキャッチボールではなかった。これがキャッチボールだったら全力で相手に対してボールを投げまくって、しかもそれを受け取ろうとしない。デッドボールになり、乱闘が起きる事必至である。

言葉のドッジボールだ。

ここで諦めちゃダメだ！　逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ……。

そう自分に言い聞かせ、少女の目を見る。気が弱くていつも折れている自分だが、ここで女の子相手に折れてしまったら情けない。龍一はその意思を視線に込めた。

少女は「負けないぞ」と視線を送ってくる龍一の目を見返した。

「……あの、こっちの質問に答えて」

「は　ら　ら　が　へ　っ　た　の」

「……はい」

結局、いつものように龍一は折れた。

「なんじゃこれは！？ 美味しい、美味しいぞおぬし！！」

「はあ……そりゃどうも」

ガツガツバクバクムシムシヤ！ と音が聞こえそうな勢いでちやぶ台の料理をかきこむ少女を横目に、龍一は炊飯器の中身を見て溜息を吐いた。

結局あの後干してあった龍一のワイシャツと学校指定の短パンを貸して着た後、少女はずかずかと家に上がり込んだ。そしてまるで初めて外国にきた人のように家の中の見物全てについて龍一に尋ねつつ、食事を要求した。

龍一は一人暮らしなので、前日の夜に準備しておく食材なども一人分しかない。ご飯などは昼の弁当用に多く炊くが、それにしたってせいぜい一合くらいだ。

そして龍一が食べるはずだった朝食は全て、すでに少女の腹に収まっていた。よっぽど腹が減っていたのか、少女は朝食分の料理だけでは満足せず、再び龍一が折れる羽目になった。

少女は弁当に使う予定だった食事も勢いよく食べる。箸は使えないらしく、フォークとスプーンを使った少女はあつという間に食事を平らげた。

「あーあ、昼飯どうしよう……」

昨日は始業式で本格的に授業などはまだ始まらないものの、今日は午後2時頃まで予定が入っていた。大掃除に教科書受け取りに数日後の入学式の準備に、色々することがある。

担任は昼食を持ってくるよう言っていたが、まあ2時くらいまでなら大丈夫だろう。龍一はそう考え、弁当を諦める事にした。後で鞆に常備してあるカロリーメイトを齧ればいい。

にしても、どれだけ少女は食べるつもりなのだろうか。既に龍一の物となるはずだった朝食と昼食を平らげたが、まだまだ物欲しそうに龍一を見ている。

「……食事ならもう無いぞ。あんたが全部食べ尽くしたんだから」

「まだまだ食い物の臭いにするんじやが、気のせいかな?」

「どれだけ鼻がいいんだよ……」

そう言いつつ、台所の上にある棚からカップ麺を取り出した。

このカップ麺は龍一にとっての非常食だった。例えば新作のゲームなどが届いてその日の内に攻略する場合、料理を作っている暇はない。そういった時に、お湯を注ぐだけで出来るカップ麺はとても便利だった。

だがこのカップ麺は非常食、今は非常時ではない。だから少女に食べさせるのは不本意なのだが……。

「てか、なんで裏庭に倒れていたためっちゃ怪しい人に食材を全部持って来なきゃならないんだ?」

「何か言ったかの?」

「いーえ何も。てか、まだまだ食べるの?」

「駄目かの?」

「さすがにこれ以上は……」

すると少女は、数年前までやっていた某消費者金融のテレビCMに出ていたチワワの如く目を潤ませ、龍一を見た。

うるうるうる

いや駄目だ。これを食べさせたら、今後俺が食べる物が無くなってしまふ。

うるうるうるうる

これを渡したら、また新しく食材を買ってこなくちゃならない。今月買うゲームと漫画があるのに、余計な出費は痛い。

うるうるうるうるうる

「……あーもうわかった。だからそんな目で見るな」

やっぱり、龍一は折れた。

「あー食った食った。ありがとよ、おぬし」

「は、はは……。どういたしまして……」

龍一は、そう力無く答えた。

冷蔵庫の中には今や食材は無く、牛乳や調味料などしか残っていないな

かった。台所の棚にあった乾麺や缶詰なども、尽く少女の胃袋に消えた。

先程お湯を注いだカップ麺を少女に渡したら、少女はすぐさまフタを取って中身を食べようとした。3分経たないと麺が固いままだとどうにか説明したが、少女はその間ずっと、餌を目の前にしておあずけを食らった犬の如く唸っていた。カップ麺の食べ方も知らないなんて、どこから来たんだろうと龍一は不審に思う。

カップ麺をスープまで平らげた後も少女の食欲は収まらなかった。数個あった缶詰を全部食べ尽くし、ようやく少女は満足したようだった。

「おいおぬし、なんで真っ白になっとるんじゃ？」

「はははは、もう笑うしかないよ。もうどうにでもなーれ」
「気でも違ったのか？」

りゅういち は 「もうどうにでもなーれ」をとなえた！

なにも おきなかった！！

ちなみに「もうどうにでもなーれ」とは、困難な現状を解決する事を放棄し、思考停止するための呪文である。

あれだけ食べたのにも関わらず、少女の腹は膨れていなかった。胃袋がブラックホールに直結してるんじゃないかと龍一は頭の隅で考える。

家にある食材は全て無くなった。缶詰やカップ麺なども含めて、学校が終わったら買ってこなければならぬ。どれだけの出費になるか考えると、頭が痛かった。

「……まさか、昼も今みたいな勢いで食べるとか言わないよな？」

「何を言うか。わしにだって限度や遠慮というものくらいあるわい。たらふく食ったから、昼は大丈夫じゃ」

「そりゃよかった」

実際昼も夜もあれだけ食べられたら、家計が傾いてしまう。

そこまで考えたところで、龍一は俺は何をやってるんだという気持ちになった。

裏庭に全裸で倒れているような得体の知れない少女を家に上げ、しかもなければなしの食料を全部与えた。こんなどこからやって来たかもわからないような人間に対して、自分はお人よし過ぎではないかと。やはり通報すべきか。そう思い、台所の電話を見る。裏庭に倒れていたのを保護したとちゃんと警察なり救急隊員に説明すれば、自分が何かしたと疑われる事はないだろう。こっちは食料を全部与えたのだ、疑われたら泣くしかない。

それにこの少女、あんな出会い方をしたという事は、確実に何かやばい事に関わっている。普通の人間が他人の家の裏庭に、しかも裸で倒れているか？

龍一の頭に浮かんだ少女の正体は、ヤのつく自由業の方々とか道を極めた背中に見事な消えないお絵かきをしたお兄さん達と関わりを持つている危ない人、というものだった。龍一が善意から保護したのに家に乗り込んで来て、「おらワシのオンナになにするんじやお前。きっちり落し前つけてもらおうか」と金を根こそぎ持って行かれるシナリオかもしれない。いわゆる美人局^{つつもたせ}である。

だがお世辞にも、龍一の家は金があるとは言えない。一人暮らしの高校生からむしり取れる金額なんて高が知れている。やるならもつと金持ちを狙うだろう。

だったら彼女は……と次々と考えが浮かんでは消え、ついに龍一は

考えることを止めた。これ以上考えていると、比喻でなく頭から湯気が出てきそうだった。

それに、案外この展開を楽しむのもいいんじゃないか、という考えも頭の片隅であった。

退屈で窮屈でお先真っ暗の息苦しい日常が、こんなアニメやゲームみたいな展開で現れた少女で変わるかもしれないのだ。あれだけ熱望していた変化を、少女を警察や病院に引き渡してすぐさま手放すのはもったいない。少女に出会っただけでも十分日常から離脱出来た。この先も少女と一緒にいたら、もっと面白い事があるのではないか。そんな考えが龍一にはあった。

龍一は早くも少女の魅力に惹かれていた。今まで二次元の女子にしか興味がなかったが、現実の女子もいいんじゃないか、などと考え始めていた。

まあいい。色々考えるのは後回しにして、とりあえず少女に尋ねる。

「で、あんたどうすんの？ 警察行く？ それとも病院？ 行きたいんなら連れていくけど」

「けいさつ？ びょういん？ なんじゃそれは？」

まあどうでもいいが、しばらくわしはここに居たい。おぬしがいいと言うならな」

……そう来たか、と龍一は呟いた。これが退屈な日常に戻るか、少女と非日常を過ごすかのルート分岐だ。ずかずかと人の家に上がって食料を全部食い尽くした割には、少女も他人の事を考えるくらいの事は出来るらしい。

駄目と言え、色々なフラグは立たない。しかしいいと言え、色

々と面白い事が起きるかもしれない。ただし、少女が危ない人達と繋がっていた場合、死亡フラグも立つかもしれないが。

どうするか？

そんなの決まっている。

「あんたがここに居たいって言うなら、別に構わない。どうせ一人暮らしだし」

「本当か!？」

少女は目を輝かせて立ち上がった……と思いきや、よろめいて姿勢を崩した。龍一は慌てて少女に駆け寄り、後ろから支える。

龍一は背が高い方ではなく、慎重は170センチ程だった。しかも少女は龍一よりたっぷり5センチ以上は背が高く、身体が傾いでも龍一の顔のすぐ横に少女の顔がくるような姿勢になった。

わずかに漂ってくるいい臭いと、全身に伝わってくる少女の身体の柔らかな感触に、思わず龍一は顔を赤くして顔を逸らしてしまった。

「おお、すまん。メシをたくさん食べたせいかな、少し眠くなってしまった。それよりおぬし……」

そこで龍一はようやく、両手の平に何か柔らかい物が触れているのに気づいた。

龍一の両手は少女の両脇の下を通るようにして、少女の胸を掴んでいた。龍一は一人暮らしなので女性用下着なんて物は当然持っておらず、少女は龍一のワイシャツと短パンだけを身につけた状態だった。

「くぁ w s e d r f t g y ふじこ l p ; @ ! ! 」

ソニックブーム
衝撃波が起きそうな速さで両手を離し、ついでに後ろに飛びのく。
少女はニヤリと再びからかうような笑みを浮かべ、

「意気地無しスケベの気の弱い男と思っておったが……。おぬし、以外と助平スケベじゃの」

「違う違う違う、俺はそんなドサクサに紛れて女の子の胸を揉むような変態じゃない！俺は紳士だ、決して変態じゃない！今のは事故だ、事故事故事故……」

「まあわしは厄介になっていいる身だから、少しくらいは揉ませてやってもいいが。おぬしの変態でも構わんよ。……あまり激しいのは困るが」

「おまえは俺をどんな異常性癖の持ち主みたいに見てるんだよ！？てか俺は変態じゃないよ。仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！！」

「へんたいというなの……。なんじゃ？」

小首を傾げた少女を見て、龍一は大きく溜息を吐いた。なんだか、朝だというのに物凄く疲れた気がする。

とりあえず朝食を食べて眠くなったらしい少女のために、居間に布団を敷いた。死んだ祖父の物だったが、虫に食われたりカビていたりはしなかった。

そして龍一はこの後学校で昼過ぎまで帰って来ないため、少女にトイレや水道の場所を教えておいた。水道の蛇口を捻ると、「なんと

！捻るだけで澄んだ水が沸いて来るとは！！」「トイレの水を流すと、「なんと！水が流れて（ピー）を流してくれるとは！！！」と一々驚かれるのには、少し疲れたが。

「ちゃんと寝てろよ。あと、勝手に家の中を漁らないこと。火事になったら大変だから」

といっても、龍一が漁ってほしくないのは自室だけだったが。

——だって、色々お宝があるからね。18禁のアレやらコレやら。

「わかっておる。わしだって、主不在の隙を狙って家を漁るほど無礼なやつではない」

少女はそう言って、居間に敷かれた布団に潜り込んだ。すぐに、小さな寝息が聞こえてきた。

もし龍一の方に害意があったら、とつくに少女は襲われていてもおかしくない。そんな状況だというのに平気で他人の家で、しかも男の前で寝るとは、信用されてるんだかひ弱に見られてるんだか……と龍一は小さく呟いた。龍一としては前者だと願いたい。後者だったらヘタレ属性が追加されてしまう。それだけは避けたい

時計を見ると、既に予鈴の鳴る15分前だった。高校から自転車で数分の距離に家があるとはいえ、まだ何も準備をしていない状態なのだ。急がなければならない。

洗顔フォームを省略して顔を洗い、水滴を拭う暇もなく2階の自室に上がる。素早くTシャツとワイシャツ、そして学生服の上下を身につけ、鞆に筆箱を放り込んで下に戻る。

冷蔵庫の容器から麦茶を500ミリサイズのペットボトルに移し替

え、それも鞆に放り込む。他の高校生なら喉が渴いたら自販機や購買で飲み物を買うのだが、出来るだけ金を節約したい龍一は家から飲み物を持っていく事になっていた。居間の祖父母や先祖の遺影に手を合わせた後、急いで家から出る。慌ただしく龍一が動いていたにも関わらず、居間で寝ている少女は起きるどころか大いびきをしていた。

高校に向かって自転車を漕ぎつつ、龍一は改めて少女の正体を考えてみた。

とりあえず少女は外国人みたいだが、日本語が喋れるから日本人の親に育てられたのだろう。だが警察や病院を知らなかったり、水道やトイレの存在すら知らないという事は、遠く外国からやって来たのかもしれない。どこかの大使館あたりに問い合わせればわかるのかもしれないが、それは先程しばらくやらないと決めた。

考えが行き詰まり、とりあえずこれからどうするかを考える。スーパー寄って食材買って、後は少女の下着も買わなければならぬ。さすがにずっと下着を着用しないままでは、目の保養どころか目の毒になってしまう。

後で、「親友達」に相談してみよう。龍一はそう考え、自転車を漕ぐ足に力を込めた。

——龍一が少女の名前をまだ聞いていないのに気づいたのは、ギリギリ朝のホームルームに間に合った時だった。

第1話 ファーストコンタクト（後書き）

ネタ解説

「いかん、危ない危ない危ない」……レスリングシリーズ

「クールになれ」……ひぐらしの鳴く頃に

「それでもボクはやってない」……それでもボクはやってない

「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ」……新世紀エヴァンゲリオン

「某チワワ」……アコム

「変態という名の紳士」……ギャグ漫画日和

御意見、御感想お待ちしております。

第2話 奇人？ 変人？ 友人？

「ある日突然、空から女の子が降ってきた」

ライトノベルなどで定番であるこんな出来事を、親しい友人達に言ってみたらどうなるか？

答えは簡単。

100人中100人がこう答えるであろう。

「妄想、乙」

もしくは、

「それ何てエロゲ？」

「なあ皆、話があるんだが」

裏庭で少女を拾ったその日の正午過ぎ、龍一は高校の屋上でそう切り出した。

屋上にいるのは龍一を含めて4名。そして龍一を除く3人が、雑誌を読んだりノートパソコンをいじったりしながら昼食を取っていた。皆、龍一の親しい友人である。1年、2年共に全員同じクラスだっ

たのだが、3年生に上がったのクラス替えにより、龍一だけ別のクラスになっていた。

元々友人が少ない龍一にとっては、こうやって昼休みに一緒に食事をする時くらいしか親友達と会う機会はない。

「どうした龍一。新作の攻略法でも教えて欲しいのか？」

そう屋上の転落防止の冊に背中を預け、雑誌を読みながらおにぎりを頬張っているのは尾形おがた敏郎としろう。ぱっと見某ジャニーズにでも所属してそうなイケメンである彼は、大企業の御曹司である。成績も常にトップ、3年生になった今も引く手数多なほどの運動能力を持つ彼は、正に才色兼備、文武両道という言葉がピッタリ当て嵌まるような奴だ。

「龍一、どうした？　まるで地雷を踏んだような思い詰めた顔をしてるぞ」

敏郎に続いて尋ねたのは、兵頭ひょうとう勝利かつとしである。どこかの体育会系大学で柔道部の主将をやってますと言っても通用しそうな巨体と全身についた筋肉を誇っている。

そんな彼は見た目通り、一応柔道部に所属して大活躍している。柔道部員の数が元々少ないとはいえ、主将を務めて全国大会に何度も出場する実力がある。

今は屋上に座り込み、片手でダンベルを持ち上げながら、もう片手で真空パックされた携帯食料を食べていた。

「まさかパソコンがウイルスに感染した？　除去してあげようか？」

古田ふるた新治しんじはそう言いつつ、あぐらをかいてその上にノートパソコンを置き、物凄い速さでキーボードを叩いていた。

瘦せていて眼鏡をかけ、ひよろつとしている新治は、一見するとひ弱そうなモヤシ君にしか見えない。

転落防止用の冊に両腕を組んで、その上に顎をのせた龍一は、改めて屋上でフリーダムに過ごしている面々を眺めた。皆食事と並行して各々好きな事をやっており、誰も龍一を見ている者はいない。

龍一は深呼吸すると、話を切り出した。

「あのさ。朝起きたら、裏庭に金髪の美少女が倒れてたんだが」

「「「はいはい、妄想乙」」」

「ですよねー」

3人のハモった返事を聞いて、思わずそう漏らしてしまった。

やはり親友であつても、いきなりそんな事を言われたら頭がどうかしているか、妄想の話をしているんだと思われるだろう。龍一が彼らの立場であつても、そう思うに違いない。

「龍一、ここは三次元の世界だぞ。そんなラノベで使い古されたような設定で物語が幕開けるような二次元の世界じゃない」
アニメ

ぢゅー、と音を立てつつ紙パック入り烏龍茶をストローで飲み干した敏郎は、呆れたように言った。勝利も頷きながら、

「大方アニメだと美少女は空から降ってくるから、多分彼女達は空挺師団に所属しているのだろうな」

と何か納得している。

「ついに龍一の頭もウイルス感染したか……」

新治は相変わらず目を画面に向けたまま、口だけを動かした。

そう、これが普通の反応だ。

だが龍一は、実際にそんなアニメみたいな状況を経験した。そして裏庭で拾った金髪の少女は、今頃家の居間でグースカ眠っているだろう。

「いやいや、本当の話だって。朝起きて裏庭の前通ったら、その女の子が地面に倒れてたんだよ」

「真面目に言ってるの、それ？」

「大真面目だ。大体、俺がそんな二次元と三次元の区別もつかないような頭のおかしい奴に見えるか？」

「「見える」」

「あるえ!？」

ちゃんと否定してくれるものだと思っていたので、かなり凹んだ。でも、俺がこんな人間だから、皆そう思うのも仕方ないか。そう考え、無理矢理納得する。龍一にも彼らが本気で龍一を危ない奴だと思っ言っているのではなく、単に面白いから言っただけだとわかる。

そんな龍一の親友達には、ある共通点がある。

それは全員、世間で言うところの「オタク」であるということだ。

アニメ、漫画、ゲームにのめり込み、とらのあなやアニメイトに通い、アニメや声優関連のイベントやコンサートがあればチケットを

入手し、そして夏と冬には同人誌即売会で獲物をゲットする。全員が龍一と同じような趣味を持っているが、3人は他にも趣味を持っていた。

例えば、敏郎は18歳以上対象のゲームが大好きである。高校生3年生にも関わらず自ら株取引をして稼いだ金で、大量のエロゲを買いまくっている。

龍一は1年生の時に敏郎と出会い、そして彼に触発されてオタク趣味が更に発展した。以前は精々ギャルゲーくらいしかやっていなかったが、敏郎にエロゲを借りて以来そっちの方もやり始めている。敏郎はイケメンで何度も女子から告白を受けているのだが、その度に、「リアル女に興味はない!!」と容赦なく切り捨てて画面の向こうの女子にしか興味が無い。そんな彼を龍一や下級生のオタク達は、敬意を込めて「オタシロさま」と呼ぶほどだ。

ちなみに、某雛見沢村とは関係ない。

ミリオタ

勝利は、いわゆるミリタリーオタクというものだ。毎年夏の陸上自衛隊の総合火力演習などには親戚中の名前を使って観覧の応募をし、高校に入学してすぐに「男子サバゲー部」を創設した。

ちなみに龍一達も、部設立の必要最低限の頭数を満たすために、一応入部していることになっている。今でも時々、半ば無理矢理エアガンを持たされて、尾形の家が所有する山の中を駆け回っている。この高校も、自衛隊の駐屯地と演習場が隣接しているという理由だけで入学した。将来の目標は、自衛官らしい。

新治は見た目通り、パソコンオタクだ。しかもハッキングなど、違

法な事にも手を出している。

インターネット掲示板の「Bちゃんねる」の相当な常連で、住人^{ねら}から崇められているそうだ。情報収集能力などハンパなく、インターネットを活用した情報収集で小遣い稼ぎをしているという。

他にもコンピュータウイルスやそのワクチンソフト、そして侵入防止のファイアーウォールなどを自作している。龍一達も、新治謹製のワクチンソフトをパソコンにダウンロードしてから、コンピュータウイルスに感染することは一切無くなった。

ちなみに以前、「どこにハッキングとか仕掛けてんの？」と尋ねた時、新治はこう答えた。

「^{CIA}アメリカ中央情報局」

だから敏郎がおにぎりを食べながら読んでいる雑誌は新作のギャルゲーやエロゲを取り上げたり攻略方法を集めた奴だし、勝利が食べているのは米軍放出品の携帯^{レーション}糧食だし、新治が見ている画面はハッキングの作業の進捗状況を表示している。

つまり皆、龍一以上に変わった連中ばかりなのだ。

そんな連中と龍一が親しい仲なのは様々な理由があるが、簡単に言えば「何か惹かれるところがあった」。オタクというのは昔ほど偏見を抱かれなくなっただが、それでもまだまだ全体から見れば数は少ない。

全員が1年生の時に同じクラスであったので、一度親しくなればとことん付き合うようになったのだ。

さて、そんな二次元大好きな連中に今朝の出来事を話した龍一だったが、反応は予想通りのものだった。だが紛れもなく少女は家にいる。龍一としては、ここは何か親友達にアドバイスをお願いしたいところである。さすがに一人では対処法は思いつかない

「いやいや、本当の事なんだって。金髪銀目、スタイルはそこそこいい。俺よりも少し身長が高く、何故かジジイみたいな口調で喋る、トイレも水道も知らない大食い美少女だ。裏庭に全裸で倒れてた」「全裸だ?!? うらやまけしからんな。まあ、お前がそこまで言うなら少しは話しに乗ってやるか。で、その女の子は今どうしてるんだ?」

「俺の家にあった食材を食い尽くした後、今で寝てる」

「それ何てエロゲだよ……」

敏郎が呆れたように言う横で、勝利が何か納得したように頷く。

「だからカロリーメイトしか食っていないのだな」

「ああ、目茶苦茶腹が減った。これからの食材も買わなきゃならんと考えたら、頭が痛くなる」

「カロリーメイトはいいぞ。体力とスタミナが全回復して、スネークも『うますぎる!』』と言うからな」

「ゲームと現実と一緒にするな」

「じゃありゲインとマウンテンデューも一緒に飲め」

「メタルギア厨、乙!」

もう投げやりである。

「B c hでスレ立てれば？ 『美少女拾ったんだけどどうすればいい？』ってな」

「多分、『妄想乙』『それ何てエロゲ？』『通報しました』ってレスが18くらいついてスレ落ち」

新治が画面から目を離さず言う。

「それより安価で対処法尋ねてみれば？」

「『襲う』なんてのがあったら俺は逮捕されるんだが」

ちなみにB c hと言うのは、巨大インターネット掲示板のBちゃんねるの略称である。

スレを立てると言うのは、質問や雑談をするための場を新たに作る事を言い、レスというのはそのスレに対する書き込みの事である。スレ落ちというのは、レスがほとんどついていないスレを、サーバー負荷軽減の為にそれ以上書き込みと閲覧が出来ないようにする行為を指す。人気がないスレは、さっさとスレ落ちしてしまうのだ。

安価というのは、レスアンカーの略称である。これは『○○な事態に陥ったんだけどどうすればいい？』とか、『○○な人にメール送りたいんだが』とか、そういったスレを立てた時に、あらかじめ番号を指定して（大抵50の倍数）、その指定された番号の時にレスした人の書き込みをスレ主が実行する、という物である。大抵ネタの書き込みがされるので、安価通りにメールをしたら人間関係が終わる可能性が高い。ネット小説——もちろんネタ作品であるが——を安価で書くと、大抵カオスな物が出来上がる。

もしも龍一があの子に安価で対応したら、確実に不審者扱いされる。『目の前で裸踊り』なんて書き込みがあったら、逮捕される。

「皆もつと真面目に考えてくれよう。俺三次元の女子と接するのは

苦手なんだよ」

「警察に通報したのか？ 犯罪に巻き込まれて逃げてきたのかもしれない。病院に連れて行ったほうがいい」

「本人の様子を見る限り、犯罪とか事故とかはないな。だって普通、っても普通の基準がわからないけど、まあ取り乱したりはしてない。むしろ元気ハツラツって感じだな」

それこそ、ドギマギする龍一をからかうほどの余裕があるほどだ。そういった犯罪に巻き込まれた線はない。龍一はそう思う。

「金髪銀目って、染めたりカラーコンタクトをしてる？」

「いや、それはない。多分外国人だろ。見る物全てに興味津々って感じだった」

「……やっぱり、警察に連れていった方がいいんじゃないか？ まさか『このまま同居します』とか、そんなラノベ的展開を望んだりしてないよな？」

真剣な表情になった敏郎の提案に、急に皆黙り込む。

それが常識的な判断だ。絶対になんらかの事件に関わっている事は間違いなく、一緒にいたら危険な出来事に巻き込まれるかもしれない。そうなる前に警察に保護してもらい、さっさと面倒事から逃げ出すべきだ。

しかも龍一は高校生。自分の面倒をみるのに精一杯なのに、他人の世話をする余裕なんてあるのか。しかも家計もかなり厳しいときている。

だからこそ、警察に保護してもらうというのは当然の意見である。だが――

「本人がさ、俺の家にしばらくいたって言うんだよ。だからそれは却下だな」

「龍一よ。お前は簡単にハニートラップに引っ掛かるだろうな」

「大丈夫だよ勝利。俺は三次元の女子には興味がないからさ。それにヤバい雰囲気を感じたら、すぐ警察に通報する」

「龍一が決めた事なんだから、俺達にどうこう言う権利はないよ。ま、なんかあったらすぐに言いな」

新治の言葉に、龍一は少し心強くなった。

やはり相談してよかった。具体的に少女をどうするかという結論は出なかったが、3人との友情を再確認出来ただけでも満足である。クラスが変わっても、これまでの関係が劇的に変わる事はないだろうと龍一は思った。

そんな事を考えると、残ったカロリーメイトを一気に口に放り込む。鞆に常備しているカロリーメイトは一箱だけなので、数が足らず腹が満たされる事はない。空腹感が少し収まった程度である。

「あ、でも襲ったりするなよ」

「しねえよ！俺は三次元の女子には興味がない。大体、お前ら俺をどんな風に見てるんだよ？」

「「変態」」」

「俺は変態じゃないよ！仮に変態だとしても、変態という名の紳士だよ！！」

午後2時で学校は終わり、龍一はまっすぐ教室を出た。他の連中は部活やら何やらに出たり、無駄に教室に残って雑談に興じるところだが、残念ながら龍一は帰宅部であり友人も少ない。

敏郎は新作のエロゲを買いにとくに学校を出ただろうし、勝利は柔道部、新治はコンピューター研究部に顔を出しているはずだ。つまり、学校にいても誰も話したりする相手がいない。

そんな自分に虚しさを感じつつも、龍一はまっすぐ高校近くの駅前にある西友に自転車を走らせた。買い物のためである。

買う物はたくさんある。今朝少女に食い尽くされ、そしてこれから食われるであろう食材。ノートなど、数日後から始まる授業のための文房具類。最後に、少女の下着。

特に下着は重要だ。一応少女には龍一のワイシャツと短パンを貸しているが、その下には何も身につけていない。このままではイロイロとアレなので、下着の購入は優先事項だった。

「―――帰りたい」

そう呟いたのは、食品コーナーで食材を購入し、階上に出店している100円均一ショップのレジに並んでいる時だった。

昼過ぎではあったが、店内には別の高校の生徒の姿がちらほら見える。龍一の高校と同じく、学期が始まったばかりで学校が早く終わ

ったのだろう。そしてそんな中、大量の中身の詰まったビニール袋を両手に下げ、さらに腕に掛けたカゴに商品を大量に放り込んでレジに並ぶ龍一の姿は、異様としか言いようがない。

最近の1000円ショップは便利なもので、1000円で下着を売っている。もちろん1000円の物で「安かろう悪かろう」が最も当て嵌まり、使い捨ての物ではあるが。当然、女物の下着も売っている。衣料品売場で買ったなら幾らになるかわからないので、出来るだけ出費を抑えたい龍一としてはうってつけと言えた。

文房具を買った後、龍一は下着コーナーに入っていくかどうか悩み続けた。そして店内の人影が少なくなった頃合いを見計らい、決心して突撃した。

素早くショーツを2着カゴに放り込んだ後、はたと気づいた。

「ブラジャーの大きさって、どれを選べばいいんだ？」

すぐさま、朝見た少女のスタイルを思い出す。巨乳とまではいいが、スタイルは良かった事しか印象に残っていない。しかもカップ数とかそういうものがわからないので、悩んでいる内に店内に人が戻って来てしまう。

意を決してCカップの物を2つ、カゴの中のノートの下にして下着コーナーを出る。そしてレジに並んだが、そんな浅知恵はあっさりとバイトの女子高生に見破られた。

バイトの顔が嫌悪感に歪み、龍一の後ろに並んでいた客の女子高生達が、

「何アレ、女装趣味？」

「マジキモい」

「変態じゃん」

等とひそひそ声を交わすのを聞いて、龍一はその場から本気で逃げ出したくなった。

「これ、なんて公開処刑？」

そう小さく呟き、ようやくバイトが金額計算を終える。事前に用意してあった小銭を叩き付けるように差し出すと、レシートを受けとってさっさとその場を離れる。

持参した鞆に文房具や下着を突っ込んでいる間も、女子高生達の「キモい」「何あれ?」「有り得ない」という言葉が、容赦なく龍一の心をえぐる。

「もう止めて! 龍一の(精神的)ライフはゼロよ!!」

そんな声を上げて擁護してくれる人はいなかった。

「モウコネエヨ! ウワアアアアン!!」

去り際に龍一は、そう叫んだとか、喚いたとか……。

第2話 奇人? 変人? 友人? (後書き)

ネタ解説

「某雛見沢村」……ひぐらしの鳴く頃に
「ライフはゼロ」……遊戯王

御意見、御感想お待ちしております。

第3話 電波少女と変態少年？

龍一が帰宅できたのは、結局午後4時近くになった。

帰宅するなり餌を数日間与えられていない犬の如く玄関に倒れていた少女に安売りスーパーで買ってきた半額の菓子パンを与え、着替えを済ませた龍一は少女が寝ていた居間の布団を手早く隅に片付けた。そして半分以上少女に食べられていた同じく安売りのスティックパンをかじりつつ、少女から話を聞こうとしたのだが……。

「で、君は誰？」

少女は答えない。

「どこから来たの？」

少女の視線は、龍一ではなく別の物に向けられたままだ。

「どうしてここに来たの？」

少女は華麗にスルー。空気扱いである。

これには存在感が薄く、空気扱いされる事による「エアーマン空気男」のあだ名を持つ龍一も、さすがにイラツときた。

「……」

笑顔のまま傍らのリモコンを取り上げ、電源ボタンを押す。すると

テレビに映っていた映像が消え、少女が「あぁーん」とおもちゃを取り上げられた子供のような声を上げた。

先程から少女はテレビにかじりついたままだった。龍一が何の気無しに点けたテレビのニュース画面を見るなり、

「なんじゃこの板は！？ 中に人が入っておるのか！？」

と、初めてテレビを見た昭和時代の人のようにプラズマテレビをいろんな角度から見回し、それからずっと龍一の事は放置してテレビに映る番組にくぎづけのままだった。

「俺の話聞ってる？ 言葉のキャッチボールって言葉知ってる？ このままじゃ言葉のドッジボールだよ」

「きゃっちぼーんというのは知らんが、ぬしの話くらいちゃんと聞いておる。ぬしはわしが誰か、何のためにどこから来たのかを知りたいんじゃない」

少女は鼻から大きく息を吐くと、ちゃぶ台を間に挟んで龍一と向き合った。服装は相変わらず龍一のワイシャツと短パンのまま。恥を忍んで龍一が買ってきたショーツは履いてくれたが、ブラジャーは「付け方を知らん」と部屋の片隅に放置されたままだ。

「で、ぬしはまず、何から知りたいんじゃない？」

「あんたの名前」

「よかろう。わしは、アイラ・フォン・コーディ。コーディ族の長じゃ」

コーディ族？ アフリカか中東のどこかの部族だろうか。それにしては外見はアラブ人やアフリカ人ではなくヨーロッパ系だし、そもそも族長にしては若すぎだ。それに龍一が知る限りの知識ではあ

辺りは戒律とかが厳しいから、女は族長にはなれなかった気がする。逆に増えた謎に頭を悩ませつつ、今度は出身地を尋ねた。

「わしが自分の生まれ故郷を教えたところで、絶対にぬしは知らない意味がないからこれは後回しじゃ」

「なんだよそりゃ。ヨーロッパの国なら俺だってわかるぞ。自慢じゃないが、地理は得意なんだ」

「よろろっぱ？ わしが来たのはそんな所じゃない。もっと遠い遠い場所じゃ」

「じゃあどこなんだよ？」

思わずそう言うと、少女は何かを決心するかのように大きく息を吸い、そして吐いた。

バラバラバラ、と遠くからヘリコプターのローター音が聞こえて来る。近くに陸上自衛隊の駐屯地と演習場があるので、龍一の家の上空はよくヘリコプターや飛行機が飛んでいくのだ。

少女は龍一の目を正面から見た。そのまっすぐな射るような視線を受けて、思わず龍一は畳の上に正座してしまう。

少女は意を決したように、口を開いた。

「わしはドラゴンじゃ。ここではない別の世界で生まれたわしらの存在は、今にも消えようとしている。わしらは生き延びるし為、この世界に来た」

ヘリコプターのローター音が徐々に小さくなり、ある一点を越えると機体が遠ざかって行きローター音が小さくなっていく。

「……はあゝ」

「なんじゃその『お前頭おかしいんじゃないか』みたいな溜息は」
「そりゃ溜息の一つや二つも出るよ。お前は電波さんかよ。電波キヤラは荒川河川敷の自称金星人の美少女と、宇宙人の見える町の頭からぐるぐる布団を巻いて被った美少女だけでお腹いっぱいだよ」

ギャルゲーなどでは電波キヤラは頭がおかしいように見えるが、過去に何らかのトラウマなどがあってそう振る舞っているだけだ。そのトラウマを解消すれば、一気に主人公への好意が急上昇してマトモな人間になる。一見攻略したくなくなるようなキヤラだが、案外可愛いものだ。

——が、それはあくまで二次元の世界の話である。現実で同じような事をやったら、頭がおかしいイタイ人、と哀れみの目で見られるか最悪病院か警察に連れていかれる。だから現実に電波キヤラがいても、龍一は絶対に攻略しようとは思わないだろう（もっとも、龍一は三次元^{リアル}の女子には興味が一切無いが）。

そういえば数年前、アメリカの新聞に「ルーピー」呼ばわりされた、自称宇宙人の総理大臣がいたな、と龍一は思った。確か妻の方は前世でトム・クルーズと結婚していたうんたらかんたら言っていて、夫婦揃って電波を超えてキチガイだった。あんなのがよく総理大臣になれたな、と今更ながら思う。

「でんぱとかわしは知らんが、本当じゃ。わしはドラゴンのコード一族の族長で、この世界に新たな故郷を作るために来たんじゃ」
「自称ドラゴンで族長で異世界人かよ。ドラゴンは架空の生き物だし、異世界なんて存在しない。現実^{こゝ}は二次元^{アニメ}の世界じゃないんだ。

頭がおかしいんじゃないか？」

「……わしの話を信じてくれんのか？」

「そりゃ当然だ。出会って半日も経っていない、裏庭に全裸で倒れていたヤツがいきなりそんな事を言い始めたら……」

するとアイラと名乗った少女は悲しそうに目を伏せ、「ぬしなら信じてくれると思ったのに……」と、肩を落とした。

さっきまでの元気はどこかに行き、いきなり落ち込んだ様子の少女を見て、龍一は慌てた。ゲームの中のキャラならいくらでもフォロ―出来るが、現実の女の子に泣かれた経験はない。そもそもギャルゲーは選択肢が画面に出て来るが、現実には自分の頭で考えて対応しなければならぬのだ。

肩を震わせ今にも泣きそうな少女を見て、とにかく謝る事にする。

「わ、悪かった。いきなり突拍子もない事を言われて、つい気が動転して……。とにかく俺が言った事が気に障ったんなら謝る。だから泣くのは止めてくれ。な？」

あたふたと謝罪の言葉を並べたが、少女は動かない。ここは土下座すべきか？ いやいや俺は当然の事を言っただけで、そこまでする必要はない……。などと混乱した頭で、とりあえず様子を見ようと龍一は少女の顔を覗き込んだ。

「……ぬしは女に騙されやすそうな雄じゃな」

覗き込んだ少女の顔は、泣いていなかった。少女は顔を伏せてニヤリと唇の端を吊り上げ、笑いをこらえていたのだ。

「お前、騙したな!？」

「はて、何の事を言ってるのかわからんのお？ わしは顔を伏せて

ただけで、別に泣いてもおらんかった。まさかぬしは、わしが簡単に泣くような気の弱い女子と勘違いして、あんなみっともない真似をしていたのか」

「ぐ、そんな事は……」

言葉に詰まった龍一の前で、少女は快活そうに笑った。口の中に、やけに長くて鋭い、まるで牙のような犬歯が生えているのを龍一は見た。

ひとしきり笑った後、少女は笑いすぎて出た涙を指先で拭いつつ、

「ま、わしもわしらの存在を知らないであろうこの世界の人間に、最初から信じてもらえるとは思っとらん。落ち込んでないから、気にするな」

と笑った。何だか少女の手の平で上手く転がされているような気がして、龍一は何だか複雑な気持ちになる。多分この少女は、なろうと思ったら小悪魔的なキャラになれるに違いない。

「まあ、正直言って今でも俺は信じてない。何か証拠があるなら見せてくれよ。例えばドラゴンの姿になるとかさ」

「今は無理じゃ。こっちの世界に来るのに力をたくさん使ったから、しばらく元の姿には戻れん。そうじゃな、3日後くらいなら元の姿に戻る」

「人の朝飯と昼飯を食い尽くした挙げ句、グースカ寝てたのに体力がまだ回復してないとか……」

「やかましいわ！」

大きな溜息を再び吐いて、龍一は質問を続ける事にした。

「で、アイラだったっけか？ 100歩譲ってあんたがドラゴンな

異世界の存在だとして話を進めよう。それで、何で俺ん家の裏庭に倒れてたんだ？　それも全裸で」

そう尋ねると、少女は——アイラは、特に考える様子もなく答えた。

「それは偶然じゃ。わしの世界とこの世界を繋ぐ『門』が、たまたまここに開いただけじゃ。わしはそれを通してここに来て、ようやくこっちの世界に着いて体力を使い果たして倒れていたんじゃ。わしが裸だったのはドラゴンの姿で門を通ったからで、特に理由はない」

アイラはそう言うのと、朝の時みたいにワイシャツの上から胸を押さえて、

「わしの裸が見たいのか？」

と誘惑するような口調で言った。コップに口を着けていた龍一は、その言葉で思いつき飲んでいた麦茶を噴き出す。

「ばっ、ばっ、馬鹿じゃねえの！？　俺をからかうな！　だいたい俺は三次元の女に興味はないんだよ！！」

「その割には顔が真っ赤じゃの。安心せい、ぬし程の年頃の人間の雄は雌の身体にしか興味がない事くらい知っておる」

「……お前なあ」

「まあぬしには借りが出来たしの。少しくらいなら触らせてやってもよいが」

「俺は人の弱みに付け込んでアレコレやるような変態じゃねえ！！」

アイラと話していると、なんか疲れる。それも自分だけが。龍一は

そう感じた。

ひとしきりアイラに笑われた後、龍一は脱線を超えて事故レベルになってしまった話を戻す。

「とりあえずお前の言う事を信じる事にしよう。それで、なんでこちの世界に来たんだ？ さっきは存在がどうか言ってたが」

そう尋ねると、アイラは口元を引き締め真剣な表情に戻った。その様子を見て、龍一も背筋を伸ばしてアイラの話を聞く。

「わしらドラゴンは、人間に認識される事によってのみ存在する事ができる。人間がドラゴンの存在を知っていなければ、わしらは『存在しないもの』として消えてしまふんじや。

じゃがわしらの世界では、人間が今にも滅びかけておる。このまま人間が一人もいなくなれば、ドラゴンの存在を知り語り継ぐ者もいなくなってしまう。そうなればわしらを認識する者はいなくなり、わしらもないものとして消えてしまふ。

そうなる前にわしらは別の世界、ドラゴンの存在を知る世界に移り住む事にしたんじや。そしてコーディ族族長であり、族長会議の長でもあるわしが、まずこの世界とわしらの世界を繋ぐ門を開くためこの世界に来た」

……わけがわからないよ。

キュウベえ

某QBさんの如く、龍一はそう言いたくなった。

「長文過ぎ。3行でまとめてくれ」

「つまり、わしらが消えるかもしれない↓その前に他の世界に逃げる↓まずわしが偵察に来た。これでいいか？」

「最初からそう言えばいいのに……」

「わしの説明を一回で理解出来ないぬしが悪い！」

「俺は文系なんだよ!」

反論になっていない反論をしつつ、龍一はアイラの話をもとめてみた。

まずアイラはドラゴンであり、龍一達がいるこの世界とは別の世界の住人らしい。自称ドラゴンなので、住「人」という表現が正しいのかどうかかわらないが。

それでアイラはドラゴンの中でも一番偉い立場にいるそうだと。ドラゴンはいくつかの部族に分かれ、族長が集まる会議で議長をやっているのがアイラ。

そしてドラゴンは、人間に認識される事によって存在し続ける事が可能だという。人間に認識されることは、人間がドラゴンの存在を知り、語り伝えるというような事らしい。人々がドラゴンが「いる」のを知っているから、ドラゴンも存在しているのだそうだと。

しかし一年程前に――アイラの世界の基準だから、こっちの世界の一年に相当するとは限らないが――、何か天変地異が起こったらしい。アイラ曰く、「空から火の玉が落ちてきて、大きな音と共に空が暗くなった」。日の光は地上に届かなくなり気温は低下し、農作物が全部駄目になって飢えと低温で人間が次々と死んでいつているらしい。このままでは人間が絶滅してしまう。そうなればドラゴンの存在を知る人間そのものがいなくなり、それはドラゴンも消えてしまう事を意味する。

そこでドラゴンの族長達は集まって話し合い、他の世界へ移住する事を決めた。ドラゴン達は様々な世界を渡る能力があり、ドラゴンの存在を知る人間がいる世界ならばその世界へと渡る事が出来るらしい。

「でも、この世界にドラゴンはいないぞ。伝説とか信仰とか、それこそファンタジー小説とかにしか出て来ない架空の存在だ」

そう疑問を口にした龍一に、アイラは、

「伝説とはいえ、ドラゴンの存在を知っておるのじゃろう？　ならばそれで十分じゃ。架空の存在であってもドラゴンがいるのなら、わしらはその世界でも存在することが出来る。逆に架空の存在にもドラゴンがいなかったら、わしらはその世界に存在するどころか門すら開けん」

と答えた。

とにかくまずは族長会議の長であり、ドラゴンの中で一番力を持っているアイラが門を開く事にした。そして異世界の門が開いた場所が、たまたま龍一の家の裏庭だったという事だ。

「もっと森とか山とか、そういった一目につかない場所に門とやらを開けなかったのか？　もしお前が裸で現れたのが警察署の前だったら、エラい事になってたぞ」

「門が開く場所をわしらは変えられん。一度その場所に開いたら、その場所からは動かせん」

「で、なんで人間の姿で倒れてたの？　お前元はドラゴンなんだろ？　まあドラゴンの姿で倒れてたら俺が困るが」

どうやらドラゴンの姿でいるのは力を使うらしい。普段は特に問題ないが、門を開いたりなどして力を大量に消耗したりすると、力の消費が少ない人間体になるそうだ。低燃費モードか、と何となく龍一は納得した。

すると今度は、アイラの方から話を切り出した。しかし今までのような老獪で達観したような言い方ではなく、おずおず、といった感じだ。

「……それで、ぬしは、なんでわしを助けたんじゃ？」

「なんでって、なんで？」

いきなりの事に、思わず質問に質問で返してしまう。

「ぬしはわしに服や飯をくれただけでなく、わしの事を信用して家で休ませてくれた。ぬしは生活が楽ではなさそうなのに。それに、ぬしが家にいない間にわしが金目の物を盗んで逃げ出していたら、ぬしはどうするつもりだったんじゃ？」

「ま、貧乏ってもう少しくらいなら余裕あるし。俺ん家に盗まれるような価値のある物はないし」

「わしが裸で意識を失って倒れていたのに、ぬしはわしを手込めにしようと思えば出来たのにそうしなかった。何故じゃ？」

「紳士ですから」

変態という名の、が付くけどね。龍一はそう心の中で呟いた。

チラリとアイラの方を見ると、アイラは歯を見せて唸っていた。どうやら「真面目に質問に答えていない」と思っているらしい。何となく、龍一はアイラは歯並びがいいなと思った。

「……まあ、自分の目の前で誰かが倒れたら助けようとするのは当然じゃないの？ それにそのまま死んだらトラウマになりそうだし。警察とか来ていろいろ面倒な事になりそうだし」

「じゃあもしわしが奴隷だったら、ぬしは助けたか？」

「奴隷なんて今の時代にいないだろ。まあ目の前で人が困ってたら、とりあえずは助けるかな」

「……そうか」

「か、勘違いしないでよねッ！ 俺ん家で人が死んでたら困るから助けたんであって、お前なんかどうでもいいんだからねッ！ 助けたのは特に理由なんてないんだからねッ！！」

釘宮ボイスだったら萌えるところだろうが、生憎高校三年生の男子がそんなツンデレ風に答えても気持ち悪いだけである。

しかしアイラは、下を向いて嬉しそうに小さく笑う。その微笑みに、龍一の心が大きく揺れた。

くそ、俺は二次元の女にしか興味が無いのに。そんな風に笑ったら、三次元もいいんじゃないかって思っちゃまうじゃねえか。

龍一はアイラを、可愛いと思ってしまった。それこそ、今までのどんなギャルゲーやアニメのキャラよりも、アイラの方が魅力的だと感じてしまう程に。

龍一は何となく、アイラの話は本当かもしれないと感じ始めていた。当然この世にそんなドラゴンだの異世界だのは存在しないし、まだアイラのことは怪しいとは感じているが、半分以上アイラの話を信じてしまっている。

それにアイラの話が本当なら、全てに説明がつく。アイラが裸で裏庭に、誰にも気づかれずに入り込んで倒れていたたり、見る物全てに驚いたり、年寄りのような言葉遣いと老獪な性格だったり、その金髪銀目の外見にも理由がある事がわかる。

……まあ、それが心から「設定」を信じているなら、アイラは電波さん確定で俺は泣くけどね。龍一はそう思った。

「それで、お前はこれからどうするんだ？ こっちの世界に移住するんたらとか言ってたが」

「そうそうそうじゃった。ぬしの人柄を見込んで、頼みがあるんじゃないが」

「出来る範囲なら何とかするよ」

そう答えると、アイラは海と森に行きたいと言った。アイラ達はドラゴンであり、森や海に住んでいるのだという。中には人間に混ざってひっそりと暮らしている者もいるらしいが、基本的には自然の中でドラゴンの姿のまま生きているという。

もしこちらの世界に移り住んだとしても、全てのドラゴンが人の姿で人間社会に混ざって生きる事を受け入れられるとは限らない。その場合に備えて、ドラゴンが暮らせるような森や海を探しておく必要があるらしい。

「海ねえ……。森は市を北に行けばいくらでも広がってるし、日本は山と森ばかりだからな。海は、やっぱり綺麗な方がいいよな?」

「できればの」

「なら九十九里あたりか。でも金が……」

そう呟きながら横目でアイラを見ると、アイラは朝やったような潤んだ目で龍一を見てくる。

溜息を吐いて、龍一は九十九里に行く事を決めた。海なら市を南に行けばすぐに東京湾に出るが、東京湾は汚すぎる。あんな所にアイラを連れていっても嬉しくはないだろう。

しかし比較的海が綺麗な九十九里に行くにも結構金がかかる。今日の食事代といい、このままの姿で外を連れ回すわけにはいかないからアイラの服も買わなければならない上に、二人分の電車代。計算すれば、多分アニメの新作ブルーレイが1本どころか2本は楽に買える。

しかし、乗りかかった船だし、このまま最後まで付き合おうと龍一

は決心した。後4日もあればアイラの力は十分回復して、ドラゴンの姿に戻れるという。アイラが本当にドラゴンなのか、それとも電波さんなのかはその時にわかる。

だがその時まで、この非日常を楽しもう。あれだけ望んでいた非日常が訪れたのだ、楽しまなければ損である。アイラの話が本当だろうとなかろうと、普段は出来ない体験が出来るであろう事は間違いない。

「そういえば、ぬしの名前をまだ聞いていなかったの。名前を教えてくださいませんか？」

「俺は神代 龍一。神代が姓で、龍一が名だ」

「うむ。リュウイチ、これからしばらく世話になる。よろしくな」

アイラはそう言って、右手を差し出した。しばらくして、アイラは握手を求めているのだと龍一は気づいた。

「……ああ。よろしく」

そう言って、アイラの右手を握る。アイラの手は、柔らかく温かかった。

数時間後。

「ほら、こっちがシャンプーとリンス。間違えんなよ」

「しゃんぷー？ りんす？」

「あれを頭につけて泡立てて、頭を洗うんだよ。泡は流してから風呂に入って、水は無駄遣いすんなよ。じゃ、タオルと着替えはここに置いておくから」

龍一はそう言って、アイラを残して脱衣所を出た。既に時計の針は午後6時を回っている。

夕食の準備をしている間、アイラはする事はないのでとりあえず風呂に入ってもらう事にした。アイラは初めて見る風呂に興奮し、早速龍一の眼前で服を脱いで入ろうとした。慌ててそれを止めさせて、風呂に関する諸注意をして今に至るわけだ。

どうやらアイラの元いた世界には風呂がない、というかアイラ達には風呂に入るなんて習慣は無かったようだ。人間やドラゴンの姿になって、川や湖で身を清めるのが精々だったらしい。そんな環境から湯の張られた浴槽を見れば、興味が沸くのは当然だろう。

「―――にしては、結構いい匂いがしてたよなあ」

脱衣所のドアを見ながら思わずそんな事を呟いてしまい、慌てて視線を逸らす。このままでは変態という名の紳士が、本物の変態になってしまう。

夕食の鶏の唐揚げを揚げていると、脱衣所からアイラの鼻歌が聞こえてきた。楽しそうなそのメロディに思わずアイラの今の姿を想像してしまい、ぶんぶん頭を振ってその考えを妄想する。

「いかんいかん、危ない危ない危ない……。そうだこういう時は素数を数えて落ち着くんだ。1、2、3、5、7、11。違う、1は素数じゃない!!」

自分でボケて自分でツツコミを入れるセルフ漫才をしながらも、次

々とカリッと油で揚げられた唐揚げが皿に積み上げられていく。脱衣所の方から、アイラが風呂場に入るドアが開く音がした。

全体の半分程唐揚げが上がった時、風呂場から猫の尻尾を踏み付けたような悲鳴が聞こえてきた。いや、悲鳴というより絶叫と言うべきか。

「どうしたアイラ、何があった!？」

悲鳴に慌ててガスコンロの火を止め、脱衣所に向かおうとする。その瞬間物凄い勢いで脱衣所のドアが開き、中からアイラが飛び出してきた。

ただし、全裸で。

「うわああああああっ!？」

今度は、龍一が間拔けな悲鳴を上げる番だった。

「ぬしよ、これは何じゃ!？ 目が! 目が! ! !」

「お前こそ何だよ! 裸で出てくんない!!」

シャンプーの泡が目に入ったのだろう、瞼を思い切りつぶりながら某ラピュタ王のような悲鳴をアイラが上げる。目を閉じていて前が見えないのか、身体をあちこちにぶつけながら泡を撒き散らしつつ龍一に近寄って来る。裸で迫って来るアイラに、思わず龍一は後ず

さる。

「うわっ、近づくな！　せめてタオルを巻け！！」

手で顔を覆って、アイラの方を見ないようにする。先程はアイラの長い髪と泡でその身体はあまり見えなかったが、このままではイロイロと危ないことになる。

だがアイラは、「目が、目が」と呻きながら龍一の方に近づこうとし、二人の追いかけっことは数分間続いた。

「こんな時でも裸を見ようといっていたのかぬしは。言えはいくらでも見せてやるものを。どうせ減るものでもないんじゃないから」

「お前はもう少し羞恥心を持ってこの痴女がッ！！！」

「わしはドラゴンじゃ！！！」

「この変態！！！」

「変態はぬしじゃろう！」

「俺は変態じゃないよ！　変態紳士だよ！！！」

第3話 電波少女と変態少年? (後書き)

ネタ解説

「荒川河川敷の自称金星人」……荒川アンダーザブリッジ

「頭からぐるぐる布団を巻いて被った美少女」……電波女と青春男

「ルーピー」……鳩Yうわなにをするやめ

「某QBさん」……魔法少女まどか・マギカ

「某ラピュタ王」……天空のしr……おや誰だろう、玄関に誰か来た?

御意見、御感想お待ちしております。

第4話 エンディングが見えないッ!!

「……はあ」

龍一は、今の自分の状況に思わず溜息を吐いた。

アイラを拾って二日目。平日なのでいつも通り学校はあり、龍一はアイラを一人家に残して学校に来ていた。アイラはまだまだ疲れがとれていないらしく、今日も朝なのにずっと居間に敷いた布団の中をゴロゴロしていて、まるでニートか引きこもりだと思ったのは内緒である。

まだ新学期が始まって三日、当然授業なども本格的に始まってはいない。明日は金曜日であり入学式もあるという事もある、今日は午前中で全ての行事が終わる事となった。

担任はこの後出張があり、生徒達に教室や廊下の掃除をしてから帰るよう言っ出て行ったのだが……。

「これだから現実^{リアル}は駄目なんだよ。掃除って言ったら、普通は何か女の子とのイベントが起きる時間だろ。ゲームの中で」

そう呟いて、誰もいない教室を見回した。

簡単に言うと、生徒達は担任の言った事を無視してさっさと帰ってしまったのだ。今日の午後に予定はなく、部活や遊びの事で頭がいっぱいだった生徒達は、担任が教室を出ていくと同時に自分達も出て行った。

あらかじめ出席番号順で班が作られていて、班ごとに週替わりで放課後掃除をする事が決まっている。奇数班と偶数班が一週間ごとに決められた掃除場所を担当する事になっているのだ。今日龍一達の班は教室を掃除する事になっていたのだが、こうして箒を持って教室にいるのは龍一しかない。

しかし生徒達が掃除をしないというのも、特に珍しい事ではなかった。時間がかかる面倒は極力避け、汚い物には触れたくない。なんでも掃除しなきゃならないの？ それより遊びたいんだけど……というのが生徒達の本音である。そして大多数の生徒が、そのような意見を持っていた。

龍一が二年生の時も、掃除をしないで帰る生徒というのは珍しくなかった。というか、真面目に残って掃除をしていく生徒の方が少数だった。

そして今日も皆はさっさと帰ってしまったので、教室には龍一しかないというわけである。

「クソッ、これだから現実はいやなんだ。普通掃除イベントっていったら、女子と二人つきりってのがセオリーだろうが。そんでもって女子がさ、『どこかに遊びに行こう』とか、告白してくるモンだろうが」

そうブツブツ言いながらも一人で机を動かし、隅々まで箒で掃き、ゴミをチリトリに集めてゴミ箱に捨てる。黒板消しを叩いて綺麗にしてから黒板を拭き、また黒板消しを叩く。

現実はいやだと思っている龍一も現実と虚構リアルゲームの区別はついているので、なんだかんだでちゃんと決まりには従って学校生活を送っている。

時間までに登校する。授業中は静かにして寝ない。提出物は期日までに出す。掃除はきちんとする。こういった事すら出来ないような奴は、ゲームをやる資格はないと龍一は思っているのだ。要するに、プライドである。

無論ルールを守るのも、それだけが理由ではない。龍一は学校の成績が一部を除いて赤点ストレスであり、きちんとルールを守る事で低い授業点を態度点でカバーしているのだ。出来る科目は校内一位を取るほどの成績を出せるが、出来ない科目は徹底的に悪いのである。しかも、出来る科目より出来ない科目が圧倒的に多いというのが現実だ。

そしてルールをきちんと守るような奴は、何かしでかさなない限り目立たない。そうすれば学校で蔓延っているイジメ等の標的にされない事も、龍一は長年の学校生活で理解していた（もつとも、狙われる時は狙われる事も身をもって知っていた）。

しかし、一人で掃除しているというのは何だか空しい。自分一人だけ真面目に残って掃除しているのに、他の連中はさっさと遊びに行ってしまう。これでは真面目に現実と付き合っている自分が阿呆みたいではないか。それが素直な心情だった。

いっそ自分も掃除を止めて帰ろうかとも思ったが、それでは誰も掃除する者がいなくなり、汚い教室で授業を受ける事になる。自分のいる環境は極力綺麗にしておきたい龍一にとって、それは苦痛だった。

「これだから現実リアル女子は欠陥だらけなんだ。ゲームだったら真面目に掃除する委員長キャラとか、掃除を押し付けて来る元気な陸上部系のキャラとかイロイロいるだろう。なのに『掃除当番代わって（はあと）』とか頼みにくる女子すりゃいない。これだから現実は……」

そんな女子が現実にはいない事くらい、龍一も知っている。だが、いないからこそ追い求めたくなるのだ。青い鳥を求める少年少女のように、宝の地図を元に海賊の財宝を探す冒険者のように、龍一も理想の女子をゲームの中に追い求めているのである。

当然、現実の女子には興味がない。皆髪を茶色に染めて、ジャラジャラアクセサリーをつけて、常にケータイを弄り、規則は平気で破るような女子は、龍一にとっては眼中に入らない存在だったのだ。

「あれ、龍一一人か？」

掃除も一段落ついた頃、その声で龍一は振り返った。教室の後ろのドアから、いつものメンバーが顔を覗かせていた。敏郎、勝利、新治である。

全員鞆を片手に提げ、どう見てもこれから帰るところだった。

「他の連中はどうした？」

「陸上部の女子が『掃除代わって』ってお願いしてきたから代わってやった」

「そんなゲームみたいな事、あるわけないだろう」

勝利の冷静なツツコミに、改めて泣きたくなる。

「つまり皆掃除を放り出して帰った中、龍一は一人残って真面目に掃除していると」

「悪いか新治？　こうやって放課後の教室で一人掃除をしていたら、なんかミステリアスな女子とのイベントが発生するかもしれないだろ？」

「「「ねーよ」」」

相変わらず、三人のツツコミは息が揃っている。

暇なら手伝ってくれと言うと、勝利は「戦場が俺を待っているんだ！！」と言って敵前逃亡し、新治は「ネットの大海を漂う迷える民達が僕を呼んでいる」と言って帰ってしまった。

一人残った敏郎は苦笑しつつ、

「お前もクソ真面目なところがあるよな……。それより、2時からだ。わかってるな？」

「ああ、わかっている。一番早くハッピーエンドを迎えるのは俺だ！！」

「いやいや、俺だよ。ま、精々頑張るんだな」

そう言って、片手をヒラヒラ振りながら帰って行った。ここが東京ドームで敏郎がジャニーズのメンバーだったなら、確実に女の子達の黄色い悲鳴が上がっているだろうと思うほどの見事な去り方だった。

その背中を見送ってから、龍一はさっさと掃除を終わらせようとペースを上げる。今日は、龍一だけでなく、敏郎、勝利、新治が待ちに待った日だった。

今日は、あるゲームが発売される日だった。ジャンルは恋愛シミュレーション、いわゆるギャルゲーである。

そのゲームを作った会社は良ゲーを数多く発売している事で有名だった。今まで発売されたゲームは全てキャラクター良し、絵良し、ストーリー良しであり、今回新たに発売されるのも当然良ゲーだとネット上では話題になっている。

しかしその会社は盗作疑惑だとか、所属している絵師の他社の引き

抜きとか、最近悪い話が上がっていた。このゲームも発売が既に三回延期されており、数多くのゲーマーが今日を待ちわびていたのである。

掃除を終えた龍一は自転車に飛び乗ると、全速力で駅前のゲームショップに向かった。そしてあらかじめ予約してあった限定版（定価12000円）と通常版（8800円）を購入し、すぐさま帰宅する。

「おお、ぬしよ帰って……」

「いいか！？ 俺はこれからゲームをやる。俺の部屋に入るなよ！ 入るなよ！？ 絶対入るなよ！？」

それ何てダチョウ倶楽部？ というツツコミが入らないのは、アイラが自称異世界のドラゴンだから仕方ない。こう言われると部屋に入るのがお約束なのだが、アイラも龍一の気迫に飲まれたのか、こくこくと頷いた。

「それより、腹が減ったんじゃが……」

言われるが早いか、朝にあらかじめ作っておいた豚肉の生姜焼をメインにした昼食をちゃぶ台に並べる。獲物を見つけた狼の如く、アイラはすぐにちゃぶ台に飛びついた。

同じく朝の内に作っておいたおにぎりの乗った皿を持って二階に上がる。アイラは昨日からテレビに釘付けだから、別に龍一が相手をしなくても構わない。アイラが見ているのはドロドロの展開が売りの昼ドラなのだが、日本人でないアイラが内容をどこまで理解でき

ているか怪しいのだが。

二階の自室のドアを閉めた龍一は、すぐさま部屋の隅に置かれた椅子に座る。そして机の上のパソコンの電源をつけ、立ち上がるまでの間に勝ってきたばかりのゲームソフトの封を開ける。

最近のゲームは一つのソフトが、限定版、通常版、廉価版の三つに分けられて発売される事が多い。

限定版は文字通り、生産数が限定されているので、確実に入手するには予約しなければならぬ。限定なので通常版では出て来ないキヤラが追加されていたり、フィギュアやドラマCD、設定資料集が付属している事が多い。予約しなかったり発売日に入手出来なかった場合、後で入手する事は非常に難しい。発売されたとしてもレアなので価格は跳ね上がっている。そして数も少ないから入手も難しい。だから龍一はとりあえず限定版は買っておく。「とりあえず」が重要なのだ。

通常版はその名の通り、普通に売られて普通に入手出来るタイプだ。絶版にならない限りいつでも新品が入手出来るが、付録などはない場合がほとんどである。龍一は通常版もとりあえず買っている。限定版と通常版では仕様が違う事があるからだ。

廉価版は発売からしばらくして発売される、価格が下げられたタイプだ。価格が低いとはいっても特に通常版とは変わりがない。

ゲームの龍一は、もちろん限定版と通常版の二種類を入手してい

た。そして早速、携帯ゲーム機のPSPに限定版のディスクを入れる。同時にパソコンも立ち上がり、ネットに繋いでいつも使っているチャットルームに入室した。

そのチャットルームは龍一の親友である新治が作成したものであり、いつも雑談やゲームの発売日などに利用している。こういったギャルゲーの発売日は、誰が一番早くヒロインを攻略出来るが競争するためにチャットルームに入る事が多い。

他の三人は電車通学なので、掃除で一人残っていても当然龍一の方が早く帰る事が出来る。三人が入室してくるまで、龍一は適当にネットを見る事にした。

それにしても、こういう時だけ自分が学生でよかったと思う龍一である。学生なら社会人よりも早くゲームを買い、攻略出来る。社会人よりも金に余裕はないが、他人より早く攻略出来る点で優越感を感じる事が出来る。

しかし、もっと金があればと思う。高校生の龍一が最近シフトを入れる余裕はない、大学生や大学を出ても就職しなかったフリーターの先輩達がシフトを入れてしまっているからだ。そのせいで金は稼げていない。もっとも、節約しているおかげでバイトで貯まった金は50万円以上ある。祖父の遺産も合わせれば、かなりの金があった。

とにかく龍一はアニメやゲームに全力で金を注ぎ込むので、その他の事は出費を削られるだけ削っていた。食材は安売りスーパーでセールの時間を狙って、半額以下の値段で購入する事も珍しくない。多分龍一のエンゲル係数を計ったら、その収入の低さにも関わらず係数が低い事がわかるだろう。エンゲル係数は家計における食費の支出の割合を示すものであり、収入が低ければ相対的に食費の割合が増えるので係数は増える事になる。だが龍一は極力食費を抑えているので、係数は異常な低さを示すだろう。

一時間もしない内に、続々と親友達がチャットルームに入室してきた。時間は午後二時少し前。二時からゲームを同時に開始して、誰が一番早くハッピーエンドを迎えられるか競争する予定だった。

『オタシロ／201X／4／10／13…55　／さて、そろそろ始めるとするか』

『紳士／201X／4／10／13…55／今日こそ俺が勝つ』

『ミリオタ／201X／4／10／13…55／戦争では十分情報収集した上で一気に攻める事が重要だ。電撃戦だ!!』

『ゲイツ／201X／4／10／13…56／プログラム弄っていきなりエンディング見れるようにしてやろうかな。やったねたえちやん!』

ちなみに紳士は龍一、オタシロは敏郎、ミリオタは勝利、ゲイツは新治のハンドルネームである。ある意味全員の特徴を如実に表していると言ってもいい。

そして時計の針は二時を指す。龍一は今回はどんなストーリーなのかとwktkしながら、ゲームを始めた。

五時間後。

「何だこのクソゲーはッ!?!」

龍一は思わずそう叫んで立ち上がっていた。PSPを机に叩きつけたくなる衝動を堪えて、チャットを見る。

皆もほぼ同時にクリアしたのか、一斉に「クソゲー」と書き込んでいた。更にネット掲示板のBちゃんねるを見ると、早速スレが立てられて住人達からクソゲー呼ばわりされていた。

今回龍一がやったゲームは、主人公の男子高校生が世界を裏から操る秘密結社に立ち向かうというストーリーだった。幼馴染、妹、委員長、先輩、後輩、お嬢様、謎の美少女、教育実習生と、選択肢によって総勢8名のヒロインの中から一人を選び、仲を深めていきながらストーリーを進めていくのだ。

だが龍一がクソゲーと呼んだのは、ストーリーが悪かったからでもキャラクターの絵が悪かったからでもない。ゲームのシステムそのものがクソみたいな出来だったのだ。

「テキストスキップ出来ない、セーブは決まった時点では出来ない。挙げ句の果てに、どのキャラを選んでもストーリーが変わらないとか、プレイヤーを舐めてるだろ!?!」

そう画面に向かって叫ぶ。

まず、テキストスキップが出来なかった。テキストとは会話以外のいわゆる「地の文」というものであり、こういったストーリー重視の物は画面全体に表示される事が多い。だが全文表示されるのを待っていてはかなりの時間がかかるので、普通は特定のボタンを押せば一発で全文を表示する事が出来る。そしてボタンを連打すれば、テキスト表示や会話を飛ばして時間を省略する事も出来る。

が、このゲームにはそのスキップボタンがなかったのだ。×も○も

△も□もどのボタンを押しても一発でテキストが表示される事はなく、全文が表示されてから初めて次のテキストに進む事が可能だった。

しかもテキストが画面一杯に、それも細かい字で表示されるのである。読むのに時間がかかることこの上なく、読むのにかなりの時間がかかってしまった。ヒロイン一人攻略するのに五時間かかったのは、これが原因である。

そして次の問題は、セーブが決まった場面でしか出来ない。

普通はスタートボタンを押してメニュー画面を開けばいつでもセーブ出来るのだが、このゲームにはその機能がなかった。仕様でそうなっているゲームもあるが、これは前述のテキストスキップ不可のせいでほぼ一時間に一回しかセーブ出来ないという状態である。

一番最悪なのは、八人の内どのヒロインを選んでもストーリーに大して変わりはないという事だ。

龍一は先輩キャラの好感度を上げる選択肢を選んでいき、最終的には主人公と先輩キャラが結婚してエンディングを迎えた。だがチャットで他の三人に確かめた限り、他の三人がそれぞれ選んだヒロインでも、龍一の先輩キャラと大してストーリーが変わらなかったのだ。

ハッピーエンドを迎える途中で一度先輩が誘拐され、主人公は先輩を助けに行く。そして秘密結社のリーダーと戦ってこれを倒すのだが、他のキャラでもこの流れは変わらない。というか全く同じなのだ。絵の中で主人公の隣にいるヒロインの絵が変わるだけで、構図もセリフも行動も全く同じなのである。どのキャラクターでも同じ展開なら、八人も出て来る必要はない。

しかも途中から音声やBGMが割れていたり、作画崩壊を起こして

いた。作画崩壊とは絵師が交代したり忙し過ぎて丁寧に絵を仕上げ
る余裕が無くなったりして、絵のクオリティが極端に落ちる現象で
ある。アニメでも度々起きる事だ。

どうやら途中で絵師が代わったらしく、ストーリーを三分の一程進
めた時からキャラの絵が崩れ始めた。最後の方はもう「コイツ誰？」
レベルまでクオリティが落ちた、というか文字通り絵が崩壊してい
た。マシな絵は、公式サイトに掲載されていたサンプルCGが全て
だった。

もしかしたら何度も発売日に遅れたので、さっさと終わらせようと
無理矢理描いたのかもしれない。それならこのクオリティの低さにも
頷ける。

が、そんな事はどうでもいい。問題は、これが詐欺レベルの代物だ
という事だ。

既にBchでは製作会社に電凸でんつっ（電話で担当者などに、問題を追求
する事。電話突撃の略である）した者も現れていた。担当者による
と全て「仕様」らしいが、こんなクソゲーが仕様だったら会社が燃
やされても仕方ない。

プレイヤーの中には無限ループや強制終了のバグに引っ掛かった者
もいるらしい。今後修正パッチが配信される予定だが、こんなゲー
ムを今後もプレイしようとするゲーマーがいるか謎だ。既に今年最
大のクソゲーという称号を得たゲームは、今後ネットオークション
で100円台で取引されるに違いない。

プレイヤーの中には猛者もいて、異常に時間がかかる原因のテキス
トキャンセル不可能を、修正ファイルを自作してインストールし、
テキストスキップ出来るようにしようとした者もいた。だがファイ
ルをソフトに当てた途端、電源が落ちてデータが全て吹っ飛んだと

いう。

「これなら小説にして出版した方が大分マシじゃねえか……」

たとえばどんな展開だろうと、ゲーマーならば全てのヒロインを攻略しなければ気が済まない。だがこれから全部のキャラを攻略しようとしたら、一人五時間×七人＝三十五時間。さらにバットエンドや他のエンディングも一応見ておきたいから（キャラが違ってても大差なさそうだが）、全部で100時間近くを費やさなければならぬ。明日は入学式で学校は休みであり、その後も土日が続くので暇なのだが、土日はアイラと約束した通り彼女を森と海に連れて行かなければならない。そうしたら土日ゲームをする暇はほとんどない。誰よりも速く攻略したい龍一としては、苦痛でしかない。

頭を抱えていると、突然PSPにメールが届いた。差出人は新治だった。

「修正ファイル作ったったwww」

という本文と共に、メールにはファイルが添付されていた。どうやらこの五時間の内に、新治は修正ファイルを自作してしまったらしい。

新治謹製の修正ファイルはテキストスキップを可能にして、いつでもセーブが出来るようになるらしい。これなら攻略にかかる時間は大分短くなるだろう。もしかしたら、明日の朝までには終わるかもしれない。

「おーいぬしよ、腹が減ったんじゃが」

階下からはアイラの間延びした声が響いてくる。龍一は新治に心の中で拝みつつ修正ファイルをインストールし、夕食を作るべく階段を下りて行った。

「そういえばぬしよ、わしは誰に移住の許可を貰えばいいんじや？」

アイラが唐突に言ったのは、居間のちゃぶ台の前に座り、夕食のアジの開きを食べている時だった。

「やっぱり国王かのう？ この国の王はどこにいるんじや？」

「日本には王なんていないぞ、天皇ならいるが」

「ならそのテンノーとやらに移住の許可を貰えばいいんじやな？」

わしらも無断で他人の土地に移り住んで、無用な軋轢を起こす真似はしたくないからの」

「天皇には権限はないからな……。頼むなら総理大臣だろ」

「ソーリダイジン？」

「合法的に、民主的に決められたこの国のリーダーだよ。ほれ、あのんだ」

そう言って箸でテレビ画面を指す。画面には、国会で答弁する総理大臣の姿が映っていた。どうやら最近の領土問題に関してのやり方が高圧的だ、と野党から批判を受けているようだ。

現在の総理大臣は就任してから一年目だ。以前は「回転ドアのようだ」とアメリカの新聞に言われたように一年かそれ以下のペースで次々と交代していたが、政権交代して初めての先代の総理大臣は四

年の任期をきちんと勤め上げた。今の総理も先代の路線を踏襲して政治をやっている。

「王に権力が無いとは、まるで飾りじゃの。ま、世界が違えばいろんなしきたりがあるんじゃないだろうが」

「まあな。てか、お前の話が本当なら、どこに行けばいいんだろうな？ やっぱり難民だから入国管理局かな？」

そう呑気に言っている龍一は、この時、アイラの話に完全に信じているわけではなかった。自分に非日常をもたらしてくれそう、そんな感じがしたから話に乗っていたのである。

実際、いつまでも自分はドラゴンだと言い張るアイラはアニメに出て来そうなキャラのようにかわいかった。龍一はとりあえずアイラの話に乗って、こんな時間が続くのもいいなと思っていた。

だが数日後、龍一は自分が間違っていた事を知る。

第4話 エンディングが見えないッ!! (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第5話 俺達は友達が少ない（前書き）

今気付いた。

毎話毎話何か食ってるシーンがある。

第5話 俺達は友達が少ない

高校三年生になり、初めて迎えた土曜日の朝。龍一はワイシャツに短パン姿のアイラを連れて自転車を押し、一路駅前に向かっていた。今日はアイラと約束した通り、この初春市はつはるの北部にある森へ彼女を連れていく予定だった。彼女の言葉によると、異世界からこちらの世界に移住する事になった際、森に住みたがる仲間がいそうなのでその下調べといったところらしい。仲間のドラゴンには海に住む者もいるらしく、明日は九十九里の方に向かう予定だ。

今日と明日の電車代などや、さらにはここ数日のアイラの食費を計算すると龍一は憂鬱になった。が、乗りかかった船だし、降りようとしても降ろしてくれなさそうなので、龍一は「もうどうにでもなれ」と開き直ってアイラに付き添っている。

「龍一、あの箱車はなんじゃ!? 馬が引いてもいないのに走っておるぞ!」

先程から自転車を押す龍一の隣では、アイラがすれ違う全ての物に興味を持ち、はしゃぎながら龍一に尋ねていた。外国人を日光江戸村とかに連れていけばこうなるんだろうなと頭の片隅で考えつつも、最初の内はきっちりアイラが指差す物の名前やどのような目的で使われるのかを答えていた。が、だんだん疲れてきたので、今では名前を言うのみに留まっている。

だがアイラがはしゃぐのも無理はない。アイラは今まで龍一の家から一步も出ていなかったのだ。本人の体力が回復せずに寝込んでいたとはいえ、「自称」異世界から来たドラゴンなのだから、これから住むかもしれない世界を早く見たいと願っていてもおかしくない。

道路の脇の線路を、8両編成の電車が走っていく。「あれはなんじゃ!？」鉄の蛇か!？」とはしゃぐアイラに、龍一は尋ねてみた。

「ここ、そんなに楽しい？」

「今まで見た事がない物が溢れておるんじゃ、楽しくないわけがないじゃろ？」

「でも空気とか汚れてるぜ？ 東京よりかはマシだろうけどさ」

中途半端に都会で、中途半端に田舎。とかどつちかと言うと田舎の初春市だが、本格的な田舎よりは空気が汚れているだろう。そう思って尋ねると、アイラは遠くを見るような、何か達観したような目をしながら答えた。

「それは仕方のない事じゃ。人間が生きていくには、森や海に手をつけなければならん。数が増えれば尚更じゃ。もしそれを止めさせるなら、わしらは人間達を間引くか生活の質を落とさせて洞穴に住まわせなければならん。わしらも人間あつての存在だし、人間の生み出した物を利用してゐる。わしらが出来るのは、森や海が汚れていく事を食い止めるだけじゃ」

それを聞いて、龍一は少し驚いた。自称「人間よりも賢いドラゴン」なら、自分達の生活のために自分達の住む環境を犠牲にしなければならぬ人間の事を、「愚か」の一言で切り捨ててゐるだろうと思つていたのだ。

だが、こんな世界に住む価値があるのだろうか。龍一はそう思った。金を稼ぐために無計画に木々を伐採する者達がいる。「毎年四国程の面積の森林が消えています」と環境保護の募金を求める声を何年

連続で聞いている事か。いくら募金をして、次の年もその次の年も、聞こえてくるのは募金の成果ではなくさらなる募金を求めて「毎年四国程の面積の森林が消えています」と繰り返す声。

先進国が穀物を家畜の飼料にする一方で、毎日数え切れない人間が餓死している。全員に食料が行き渡っていないのに、人口は次々と増えていき飢餓を悪化させていく。しかし彼らが必要とする穀物は、難民支援のためではなく家畜の飼育やバイオ燃料生産のために回される。

親になる覚悟すらないのに子供を産み、「疲れた」と言って虐待する大人がいる。毎年毎年親がパチンコで遊んでいる間に、車内で熱中症になって死ぬ幼児がいる。食事を与えず放置し、熱湯を浴びせ遊ぶ金欲しさに子供の裸の写真を売る親がいる。

「やってみたかった」という理由で同級生を殺す子供がいる。バスを乗っ取り、教室でカッターナイフを振り回し、人を殺すという事に実感を持ってない子供達がいる。

「生きていくのに疲れた」と自ら命を絶つ子供や大人は、交通事故よりも死者が多い。「イジメをなくそう」「悩んでいないで、まず人に相談しよう」というスローガンが溢れているのに、毎年自殺する人は絶たない。

要するに、この世界は壊れてしまっている。まだまだ18歳だが、龍一はその事を実感していた。

何をやっても無駄。親が子を殺し、子が親を殺し、子が子を殺す。いくら高い目標を定めても達成されない環境保護。金のためなら見ず知らずの他人がいくら苦しんでも構わない大人達。皆が目先の利益しか求めていない。

世界はとつくに壊れている。だが皆それに気づかないフリをして、問題解決を先送りする事しか出来ない。時が経つに従って、徐々に息苦しくなっていく世界。

こんな世界、移住する価値もない。「ドラゴンの存在の危機」だか何だか知らないが、移住したところで人類もろとも滅びるか、敵対して戦争が起きてどちらかが地球の支配者になる未来がオチだろう。

龍一がアイラにそう伝えようとした、その時だった。

「龍一？」

聞き覚えのあるその声に、龍一は足を止めていた。そして、恐る恐る背後を振り返る。

物思いに耽っていた龍一は、いつの間にか駅を通り過ぎて目的の西友の前にいた。今のアイラは外を出歩くには向いていない、というか一瞬にいる龍一が職務質問を受けそうな服装なので駅前の西友でちゃんとした服を買う事になっていたのだが、龍一の背後にいた男達にそんな事情は関係なかったようだ。

「敏郎、勝利、新治！？ 何でここに！？」

「いや、俺達は部活に行くところなんだが」

「というか、何故龍一がここにいるのだ？」

「てか、その美少女は？」

質問に質問で返された。

昨日は金曜日だったが入学式があったため、一応男子サバゲー部の

創設メンバーの一人であり部員でもある龍一は、敏郎らと共に新入生勧誘に登校していた。敏郎のルックスに、女子ばかりがマネージャー志望としてホイホイ釣られていたのがオチだが。

男子サバゲー部の部長である勝利は、柔道部の主将も務めている。新治はコンピューター研究部に所属しているので、二人が部活というのはわかる。だが、何故敏郎まで登校する必要があるのだろうか？ 敏郎は男子サバゲー部にしか所属していないし、サバゲー部は基本休みばかりのはずなのだが。

「いや、学校の方がゲーム出来るだろ？」

そう尋ねると、敏郎はそう答えた。某大手企業の御曹司である敏郎は、休日でも家にいるのは疲れるらしい。そこで部活という理由をでっちあげて、休日は学校でゲームをしているそうだ。

そういえば、男子サバゲー部の部室は何故か色々と揃ってるな。龍一は頭の片隅でそう思った。部員が10人かそこらしかないのに、部の創設時に敏郎は一番広い間取りの部室を獲得してきた。以来折り畳み式ベッドやらガスコンロやらテーブルやら冷蔵庫やら本棚やら大画面薄型テレビやらプレイステーションが持ち込まれ、今では泊まり込む事が可能な程快適な空間と化している。

ちなみにベッドやガスコンロは勝利が「野外訓練の際の道具」として部の備品名目で持ち込み、ゲーム類は敏郎が「ファーストパーソンシューティングゲーム（一人称目線のシューティングゲーム）を用いての練習用」という名目でいつの間にか敏郎が持って来た代物である。

「で、龍一よ。その美少女は誰だ？」

新治の質問を勝利が繰り返した。

これはマズイ。直感的にそう思った。

今のアイラの服装は、上はワイシャツ下は短パンちなみにノーブラ。こんな服装の美少女を連れて堂々と歩いていたら、周りの人々はどう思うだろうか？

どう見ても変態です。本当にありがとうございました。

勝利がその怪力で素早く龍一を引っ張り、四人で円陣を組むが如く顔を付き合わせる。

「えーと、彼女はアイラさん。前に話した、裏庭に倒れていた少女だ」

「なんとまあ、龍一に妄想具現化スキルがあったとは」

「妄想じゃねえよ」

「その技を俺にも伝授してくれないだろうか？　ちょうど12人目の俺の嫁が出来たところなのだが」

「だから妄想じゃねえって!!」

ボケているのか真剣なのかわからない新治と勝利にツッコミを入れる。すると今度は、敏郎が口を開く。

「じゃあ、エクスカリバーヴァロン聖剣の鞘を使ってサーヴァントとして召喚した英霊か？

『問おう。貴方が私のマスターか？』とでも言われたか？」

「どこの空腹騎士王さんだよ？　あれがセイバーさんみたいな凛々しいお方に見えるか？」

そうアイラを指差して言う。口元を引き締め、目をキリツとさせ、真面目そうな表情をさせれば、某セイバーさんに見えなくもない…事はないと龍一は思う。共通点といえば大食い金髪という事く

らいか。

「まあそんな事はどうでもいい。まさかお前の言っていた事が本当だったとはな」

「ああ。俺も最初はアニメの見すぎで頭がおかしくなったのかと思っただよ」

「あれ？ 龍一って今まで頭がマトモだったの？」

「(´・ω・、)」

さらっと毒を吐いた新治に傷つきながらも話を続けようとした龍一は、一旦アイラの方を振り向いた。目が合うと、アイラはにっこり笑って手を振ってくる。どうやら三人が龍一の友人であり、大切な話をしていると思って口を挟まないようにしているのだろう。会話内容はギャグそのものだが。

「……そんなこんなで、俺は自称異世界から移住先を探しにやって来たドラゴン様に、この世界を案内しているわけだ」

ざっと今までの経緯を説明している間、三人は数回質問を挟むだけで黙ったままだった。説明が終わっても、三人が口を開く事はない。

「……あれ？ 何か言う事は？」

「にわかには信じられん。が、あの理想的な外見や振る舞い、性格を見れば、頭ごなしに否定はできん」

勝利が唸るように言う。ちなみに理想的というのは、二次元の世界に出て来そうな美少女の事を指す。断じて現実のアイドルや女優の事ではない。

「その話が本当なら、これからあんな美少女が続々とやって来るの

か!？ 現実^{リアル}もやれば出来るじゃないか!!」

ヒヤッハー状態の敏郎である。ジャニーズにいてもおかしくないイケメンなのに、中身が残念な敏郎は、現実の女性に興味はないという。理想的な（アニメとかに出て来そうなという意味で）少女にこれから巡り会えるかもしれないと知ったら、その嬉しさといったらないだろう。

ヒヤッハーする敏郎と拳を突き上げる勝利の横で、新治が中指で眼鏡を持ち上げて冷静に呟く。

「でもさ、あんな格好させて外を出歩かせるってどうよ？」

「仕方ないだろ。俺ん家に女物の服なんてないし、恥を忍んで買ってきたブラジャーはつけてくれないし」

途端に、三人は一斉に龍一から離れ、噂話に興じる主婦の如く手で口を覆ってひそひそ言葉を交わす。「女装」「変態」という声が聞こえたのは、気のせいではない。

「俺が女物下着を買ってきたのはアイラのためだから! 決して女装とか男の娘とか関係ないから!」

「でもさ、下着つけてない美少女を外に出歩かせるってどうよ? それなんてエロゲ? ていうか羞恥プレイ?」

「この痴漢め」

「変態」

「俺は変態じゃないよ! 例え変態だとしても、変態という名の紳士だよ!!」

これから長い間自転車をこがなければならぬのに、その前に体力を使い果たしてしまいそうになる。

「でもさ、まあ、言う事は一つだよね」

「そうだな」

「だね」

敏郎、勝利、新治は目を合わせ、何事か無言で確認する。怪訝な顔をする龍一に向けて、三人は声を合わせて言った。

「リア充爆発しろ」

「最初見た時は何かと思ったが、以外と気持ちいいのお！ ほれ龍一、もっと速く走らせんか！」

自転車の後部席に横向きに腰掛け、龍一の肩を掴んだアイラが笑顔で叫ぶ。自転車が倒れないよう必死にハンドルを操りペダルをこぐ龍一は、既に汗だくだった。

その後「出て行けえ！」「貴様は祖国を裏切った！」「逝ってよし」と叫んで走り去った三人を見送り、今度こそ龍一は西友でアイラの服を買う事にした。応対した店員はアイラがどう見ても外国人なので困ったような顔をしていたが、龍一が日本語については問題ないと伝えるとホッとしていた。平均的日本人にとって、日本語がわからない外国人の応対は宇宙人とのファーストコンタクトと同じくらい難しいからだ。

アイラの服装については、「宿泊していたホテルの小火^{ぼや}で荷物が焼け親類の自分の家に泊まっている」という説明でどうにかごまかした。ついでに下着のつけ方も教えておいて下さいと頼んだら、さす

がに怪しまれたが。

とりあえず一番安い、外を歩き回るような服装一式を着せるように店員に頼むと、店員はTシャツとパーカー、それにジーンズとスニーカーを持って来た。一番安いのはいえジーンズなどは1000円近かったし、龍一の財布から次々と野口英世さんが去って行った。

「しかし、この下着はどうにも馴れんの。胸が締め付けられるようじゃ」

「お前、締め付けられる程胸あったつけ？」

思わず呟いた言葉にアイラはムツとしたのか、口を尖らせて龍一の頭を軽く叩いた。

「ちよつ、今一生懸命こいでるんだから叩くなよ！」

「わしにだって胸くらいあるわ！ 第一これは仮の姿に過ぎん！」

そう言うとなを思ったのか、アイラはニヤリと笑みを浮かべて思い切り龍一に抱き着いた。今まではバランスを安定させるために軽く龍一の腰に手を回していたのだが、上半身を大きく背中に押し付けるような格好となる。

背中に二つの柔らかい物の感触を感じ、龍一はアイラに対する考えを改める事にした。そこそこ胸はあるようだ、といった考えだが。

そーいやこれって、いわゆる青春タンデムってやつじゃね？ 背中の感触に麻痺している思考が、どうにかそんな言葉を紡ぎ出す。

前に男子、後ろに横向きに座った女子。よくアニメや80年代物のドラマでよく出てくる、彼氏彼女がよく下校時にやる二人乗りである。それらは青春の一ページのように語られているが、当然語るのはリア充である。

もちろん、龍一は今まで彼女がいた事なんてない。それどころか女

子の友人すら今も昔もない。学園物のアニメでよく青春タンデムをしているシーンを見て、「俺もいつか女子と二人乗りをしたいものだ」と心の底で思っていたが、こんなところで叶うとは思わなかった。

これで制服姿だったら言う事はないんだが、と小さく呟くと、

「何か言ったかの？」

とアイラが聞いてきたので慌ててごまかす。アイラは龍一に聞こえないくらいの小さな音や、遠くにある物を普通に見る事が出来るらしいから、うっかり下手な事は言えない。

その間にも自転車は、初春市を北に向けて走っていく。今回龍一達が向かっているのは、「初春の森」と呼ばれる県の施設である。周囲を田園に囲まれた公園のようなものだが実際はほとんど手付かずの森で、数キロ四方の森の外周部ではキャンプやバーベキューが楽しめるが、中心部は歩道を外れたら途端に迷いそうになる程の密林状態だ。

以前住宅街を造ろうと一部が切り開かれたが、少子化の上に近くに学校も無ければ駅もないという立地条件が災いし、入居する者がほとんどおらず余った土地は植林されて森に戻されたという逸話がある。つまり、微妙に田舎な初春市の中でも、ドがつく程の田舎なのである。

そんな場所に向かっているのだから、段々車道を走る自動車は少なくなっていく。住宅も近代的なマンションなどから日本的な木造住宅へと変わっていく。龍一の家も日本家屋だがこの辺りにあるのは農家と言ってよく、納屋やトラクターの車庫が庭先にある。アイラも物珍しいのか、あれこれと指差して質問していた。

「そういえばさっきの小僧達、ぬしの友人か？」

その内話題は、駅前で会った三人に移る。アイラの外見年齢も自分達とほとんど変わらないのに小僧扱いとはこれ如何に、とも思ったが、自称ドラゴンなんだから仕方ないと龍一は納得した。

「ああ、あいつらは俺の親友だ。……というか、あいつら以外に友達がいらないんだがな」

「寂しい奴じゃな」

「やかましい！ 友達なんてゲームのスイッチ入れればどこにでもいるんだからいいんだよ！」

アイラは哀れむような視線で龍一を見ていたが、当の本人は自転車をこぐのに必死で気づく事はなかった。

「最後に『りあじゅう』とか言っておったが、りあじゅうって何じゃ？」

「……簡単に説明すると、俺みたいじゃない人間だよ」

「助平^{すけべ}だったり変態じゃない人間というわけか」

「お前俺をどんな目で見てるんだよ！？」

このままでは大きな誤解を生みそうだったので、「彼氏彼女がいたり友達が多かったり、現実が充実しているような奴らの事である」と簡単に説明しておく。

ちなみに「リア充爆発しろ」というのは、非リア充がリア充を羨んで吐く捨て台詞のようなものである。

「では、ぬしは現実に満足していないのか？」

「出来るわけないだろ、現実なんてクソゲーだよ。ゲームで起きるような事の百分の一も起きやしない。食パンくわえた女の子と曲が

り角でぶつかったり、空から女の子が降ってきたり、自分に何か秘められた力があつたりするわけでもないし……」

それから龍一は、長々といかに自分が現実^{リアリティ}に充実出来ていないかを語った。

「——というわけで、俺は現実のリコールを訴えたい！　どこかに！」

「なるほど、つまりぬしは現実を受け入れられないんじゃないかな」

「……ああそうだよ。こんなバグだらけな現実、俺は嫌だ」

自分も敏郎も勝利も新治も、上手くいかない現実を認めたくはないから二次元の世界に逃避しているのかもしれない。敏郎は何が不満なのかは知らないが、本人なりに悩みもあるのだろう。

龍一は彼女いない歴〇年齢だし、告白された事もない。バレンタインデーにチョコレートを貰ったことも、クリスマスを友達と過ごした事もない。女子はサッカー部やらバスケット部やらのイケメンにしか目が行かないから、龍一なんて空気扱いである。存在を忘れられる事も珍しくはない。体育の準備体操で二人一組になる時は余った人とやっているし、遠足などで友達で班を作れと言われたら地獄である。

自分なりに真面目にやる事しか取り柄がないのに、真面目に頑張っても報われる事はない。結果が出ないから評価もされない。しかも女子ときたら真面目にやっている地味な奴よりも、規則を平気で破るような不良のイケメンに惹かれるらしい。これでは真面目にやっているのが馬鹿みたいに思えてくる。

そういうわけで龍一は現実^{リアル}に絶望し、二次元の世界に逃避したのだ。ゲームの中なら真面目にパラメーターを上げていれば女子に告白さ

れる。フラグ管理をきちんとしていればどんなエンディングも迎えられる。現実よりもゲームの方がよっぽど報われるというものだ。

無論、龍一もこれが現実逃避だとわかっている。だがこうするしかないのだ。いつ裏切られるかわからない現実にきちんと向き合う勇氣は、龍一にはない。

「こんな間違った事がまかり通っていて、正しい人が馬鹿を見るような世界、受け入れろって方が無理だろ。その点、ゲームは真面目にやっていれば報われるからな。アニメの世界には夢も希望もあるし、下らない現実よりも価値はある」

「じゃあ、なんでわしを助けたんじゃ？ わしは『あにめ』とか『げーむ』みたいな『にじげん』の世界の人間じゃないのに」

「だから、俺ん家で倒れられていたら困るからだって言っただろ？ 何度も言わせんな」

もちろん、それだけではないが。

アイラを見た時、龍一はアイラと一緒にいれば何か面白い事が起きるんじゃないかと直感的に思った。まるで二次元の世界から出て来たような龍一にとっての理想的な美少女であるアイラに、一目惚れのような感情を抱いてしまった事もある。

だが龍一がアイラを助けたのは、やはりその性格のせいなのだろう。真面目故に他人が困っているのを見ると、自分が苦しい状況でもつい手を差し延べてしまう。基本的に、そんな人間なのだ。

何となくその事がわかったらしいアイラは微笑むと、顔を龍一の背中押し付けた。いきなりの行動に、龍一がこぐ自転車がフラフラと蛇行する。

「おいこら、何やってんだよ!? 危ないだろ!」

「ふふ、ぬしに女の経験がないというのは本当らしいの」

「黙らっしゃい!!」

ぎゃあぎゃあ龍一が言っている内に自転車は田園地帯に入り、やがて前方に森が見えてきた。

今回の目的地、初春の森である。

数時間後、森の中をざっと回った龍一とアイラは、森の外側にある公園にいた。公園といっても遊具などがあるわけではなく、単なる芝生の地面の広場だ。

「で、どうだったんだ? 移住とやらはできそうか?」

ペットボトルのお茶をアイラに手渡しつつ、龍一はアイラに尋ねる。時刻は既に正午を回っており、二人は芝生の地面に座って昼食をとることにした。

アイラは龍一が朝早く起きて作っておいたおにぎりを頬張りつつ、

「むぐ……人の手が入っている場所であってもあのような状態ならば……もぐもぐ……山などはもっと良い状態であろうな……んぐ」

「口に物を入れたまま喋らない」

日本の国土の三分の二は森林らしいから、どこにでも山や川があると言ってもいい。しかも2000年代に入ってから環境保護運動が活かされていて、今時森林伐採をしようとする者もないから環境が破壊される恐れもない（というより、日本の大半の木々は材木に向いていないので、単に利用価値がないだけだが）。

移住するならこんな公園よりも、山奥の農村とか漁村がいいだろう。もしかしたらドラゴン目当ての観光客が増えるかもしれない。水筒に入ったお茶に口をつけつつ、龍一はアイラを眺めた。

金髪銀目、身長は龍一より高い175センチ程度。体型は……スレンダーと言っている。

「ぬし、なんか失礼な考えを抱いてないか？」

「いいえ何も」

アイラは心を見透かす能力でもあるのかと動揺しつつも、アイラの観察を続ける。

龍一が見る限り、外見から判断するとアイラは外国人な美少女ではない。どう見たってドラゴンではない。

アイラが自分はドラゴンだと言い張るので龍一はそうに扱っているが、心の底では当然ながら信じていなかった。科学全盛で今や各国が火星に向けて人を送り込むとしているこの時代、ドラゴンなんてファンタジーな存在は話のネタにもならない。

龍一はSF好きだが、やはり異世界云々の話も信じていなかった。現実には現実、そんなアニメやゲームみたいな事が起きるわけがない。要するに、きちんと現実と虚構の区別がついていて、現実を冷めた目で見ているのである。

「これで自分はドラゴンだとか言ってるから、残念な人にしか見え

ないんだよなあ……」

その呟きはアイラの耳には届かず、龍一は公園の芝生の上に横になった。

まあ、アイラが残念な人だろうと何だろうといい。しばらくはアイラに付き合って、普段は味わえない楽しみを経験するのもいいだろう。彼女と一緒にいたら、理想もへったくれもないこの世界でも、少しは楽しめそうなのだから……。

手を伸ばせば青空を眺めつつ、龍一はそう思い、目を閉じた。

第5話 俺達は友達が少ない（後書き）

ネタ解説

空腹騎士王さん……Fateシリーズ

「出て行けえ！」……レスリングシリーズ

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290w/>

ドラゴン様にお願いを

2011年11月27日19時52分発行